

平成25年度
教師海外研修プログラム(ケニア)
報 告 書



2014年(平成26年)



独立行政法人 国際協力機構
九州国際センター (JICA九州)

目 次

I. 研修概要

参加者リスト	5
派遣前研修スケジュールとその様子	6
現地研修スケジュールとその様子	8
帰国後研修スケジュールとその様子	10

II. 海外研修報告書

田中朋子	13
田 歩	17
福岡弘道	21
岸 森 布美子	27
小坂 征 史	31
上塩入 美 喜	35
益 田 寛 子	40

III. 授業実践例報告書

田中朋子	47
田 歩	52
福岡弘道	59
岸 森 布美子	68
小坂 征 史	72
上塩入 美 喜	80
益 田 寛 子	87

※ 教員、および児童/生徒の原文を活かして掲載しています。一部表現や体裁のばらつきがありますがご了承ください。

※ 過去の実践事例を、JICA九州のホームページに掲載しています。

<http://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html>

I. 研 修 概 要

参加者リスト

参加教員

	県	所 属	氏 名	担当科目
1	福 岡	北九州市立南小倉小学校 校長	田 中 朋 子 たなか ともこ	家庭科
2	福 岡	田川市立金川中学校	田 淵 歩 たぶち あゆみ	英 語
3	福 岡	福岡市立柏原中学校	福 岡 弘 道 ふくおか ひろみち	社会科
4	熊 本	熊本市立二岡中学校	岸 森 布美子 きしもり ふみこ	英 語
5	大 分	大分県立山香農業高等学校	賀 来 宏 基 かく ひろき	公 民 (現代社会)
6	宮 崎	宮崎県立赤江まつばら支援学校	小 坂 征 史 こさか まさふみ	英 語
7	鹿児島	私立希望が丘学園鳳凰高等学校	上塩入 美 喜 かみしおいら みき	英 語
8	鹿児島	鹿児島県立鹿児島聾学校	益 田 寛 子 ますだ ひろこ	全 科

同 行 者

	県	所 属	氏 名
1	佐 賀	JICA デスク佐賀	松 尾 典 子
2	福 岡	福岡県立福岡学園 (JOCV ケニア OV)	安 部 和 弘

地方マスメディア派遣

	県	所 属	氏 名
1	佐 賀	佐 賀 新 聞	林 大 介

派遣前研修スケジュールとその様子

■ 7月6日（土）

時 間		内 容	担 当
10:20		受 付	
10:30	5	司会及び担当スタッフ紹介	
10:35	5	JICA 九州市民参加協力課課長挨拶	市民参加協力課 田中 課長
10:40	20	JICA 事業概要、教師海外研修趣旨説明	市民参加協力課 桑江 職員
11:00	30	自己紹介（アイスブレイキング） 4つの窓→交流 ①名前（コース） ②どこから？（学校名） ③次に生まれるとしたらどこの国？ ④海外研修で持って帰りたい「お土産」は？	ファシリテーター： 松本亜樹 氏
11:30	40	開発教育とは？ ・「開発」の意味について（What） ・何をめざすのか？（Why） ・どのような手法があるか？（How）	ファシリテーター： 松本亜樹 氏
12:10	50	休 憩（ランチ）	
13:00	120	授業実践のために① ・DVD「チョコラ！」（一部）視聴 ・貧困のウェビング	ファシリテーター： 松本亜樹 氏
15:00		休 憩	
15:10	60	授業実践のために② 事例発表 （清田憲一郎先生 熊本市立五福小学校）	熊本市立五福小学校： 清田憲一郎 先生
16:10		休 憩	
16:20	60	授業実践のために③「現地での視点の整理」 ・現地でやりたいこと（ブレイクストーミング） ・ランキング（拡散→収束） ・発表（自分の問題意識を明確にする） ・Q & A	市民参加協力課 桑江 職員
17:50		事務連絡（明日のスケジュール等）、 アンケート記入	市民参加協力課 桑江 職員
18:30		懇 親 会	

■ 7月7日（日）

時 間		内 容	担 当
9:00	30	事務手続き（渡航、保険、留意点他）	市民参加協力課 桑江 職員
9:30	60	ケニアの基礎知識他	JICA ケニア事務所 OB 平 知子 氏
10:30		休 憩	
10:40	60	草の根技術協力「健康な地域社会をつくる学童 支援プロジェクト」（長崎大学）の概要説明	長崎大学 草の根事業担当 風間 調整員
11:40	50	参加者ミーティング （役割分担、研修までの準備）	市民参加協力課 松尾 推進員
12:30		休 憩（昼食）	
13:30	30	参加者ミーティング（続き）	
14:00	30	ふりかえり & 今後（渡航当日と帰国後）の流れ 確認 アンケート記入	市民参加協力課 松尾 推進員
14:30		閉会の挨拶	市民参加協力課 田中 課長
14:35		解 散	

現地研修スケジュールとその様子

Date		Time	Schedule	Stay
7月24日	水	16:45 18:10 21:20	福岡空港発 (KE790) インチョン空港着 インチョン空港発 (KE959)	-
7月25日	木	05:00 11:00 -11:30 14:00 -17:00	ケニア空港着 ホテルへチェックイン JICA ケニア事務所でのブリーフ ケニア国立博物館訪問	Heron Hotel (ナイロビ)
7月26日	金	午前 午後	長崎大学熱帯医学研究所ケニア・ナイロビ 研究拠点訪問(草の根技協、科学技術技プロ) 青年海外協力隊古賀隊員の活動視察	Heron Hotel (ナイロビ)
7月27日	土	午前 午後	青年海外協力隊清水隊員の活動視察 セーブ・ザ・チルドレン・センター訪問	Heron Hotel (ナイロビ)
7月28日	日	午前 13:30 14:20 18:00 18:45 19:00	ナイロビ国立公園訪問 ナイロビ空港発(国内線)(KQ656) キスム空港着 ヴィクトリア湖周辺の視察 フェリー乗り場へ移動 Mbita 行きフェリー乗船 Mbita 着 ホテルへチェックイン	Mbita
7月29日	月	 17:00 17:45	草の根技協「健康な地域社会をつくる学童 支援プロジェクト」(長崎大学) 活動視察 Kisumu 行きフェリーへ乗船 Kisumu 着	Kisumu
7月30日	火	AM 19:00 20:00	Eldoret へ移動 青年海外協力隊荒巻隊員の活動視察 Eldoret 発(国内線)(KQ665) ナイロビ空港着→ホテルへチェックイン	Gigiri Homestead Guest House (ナイロビ)
7月31日	水	午前 午後	技プロ「中等理数科教育強化計画プロジェ クト」活動視察 一村一品活動グループ視察 (Banana chips & Banana fibre)	Gigiri Homestead Guest House (ナイロビ)

Date		Time	Schedule	Stay
8月1日	木	午前 午後	モヨ・チルドレン・センター訪問 アマニ・ヤ・アフリカ訪問	Gigiri Homestead Guest House (ナイロビ)
8月2日	金	午前 午後	マサイ・マーケット JICA ケニア事務所へ終了報告	Gigiri Homestead Guest House (ナイロビ)
8月3日	土	10:30	ナイロビ空港発 (KE960)	-
8月4日	日	04:50 08:00 09:15	インチョン空港着 インチョン空港発 (KE787) 福岡空港着	-

帰国後研修スケジュールとその様子

■ 8月24日(土)

時 間		内 容	担 当
9:40	10	受 付	
9:50	5	あいさつ	市民参加協力課 田中 課長
9:55	15	オリエンテーション	ファシリテーター 松本亜樹 氏
10:10	60	ケニア研修のふりかえり (Want)	ファシリテーター 松本亜樹 氏 参加者
11:10	10	休 憩	
11:20	60	「生きる力」(仮題)	NPO 法人 箱崎自由学舎 ESPERANZA 代表 小田哲也 氏
12:20	60	昼食	
13:20	60	授業実践のために 事例発表	大分県教育庁高校教育課 産業教育指導班 指導主事 森 浩三 氏 (2012年度教師海外研修参加者)
14:20	230	授業案作成 ①「ねらい」の絞り込み ②グループで共有→テーマ設定 ③授業案づくり	ファシリテーター 松本亜樹 氏
18:10		事務連絡(明日の日程確認等)	市民参加協力課 桑江 職員
18:30		懇 親 会	

■ 8月25日(日)

時 間		内 容	担 当
8:45	15	集合、模擬授業準備など	ファシリテーター 松本亜紀 氏
9:00	10	オリエンテーション	
9:10	180	模擬授業 ① A グループ ② B グループ ③ C グループ	ファシリテーター 松本亜紀 氏
12:10	60	昼 食	
13:10	60	ふりかえり	
14:10	10	今後に向けて	市民参加協力課 田中 課長
14:20		解 散	

Ⅱ. 海外研修報告書

学 校 名

北九州市立南小倉小学校

氏 名

田 中 朋 子

担当教科

家庭科

1 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

- 開発途上国の教育や子どもを取り巻く環境を知る。
- 青年海外協力隊員や NGO 団体の支援や活動の状況を知り、世界へ視野を広げる。
- 途上国の現状や課題を知り、自分にできることを考える。

2 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

- ケニアの人々の屈託のなさ、友愛の心。広大な自然の中で、今日を一生懸命に生きる姿に勇気もらい、元気で屈託なく笑う子どもの笑顔に癒された。
- 日本は、経済大国になり、今後は世界に向けてたくさんの貢献をしなければならないと感じた。
- 当たり前的事って何か、本当の幸せとは何かを考える時間となった。コンビニもゲームセンターもない。しかし、少ない食べ物を分ち合い、輪になってご飯を食べ、満天の星の下で眠る暮らしがある。満身に勉強する施設も道具もない。しかし、子どもたちは目を輝かせて学校に通う。人間同士の絆、自然と人間との調和。豊かになった日本には失われたものがケニアには残されていた。

3 教育指導への活用について

- 「子どもの笑顔は地球の未来！」「教育は未来を創る」教育の大切さを感じた。他国の現状を想像し、大きな課題を共有する広い心を持ち、国際社会で生きる日本人を育てるための国際理解教育を進める。
- 改めて感じた日本のよさや世界に繋がる環境問題などについて学習を広げ、自分にできることを考え、実行できる人間を育てる。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

- 他国の現状を実際に肌で感じることができ大変貴重な充実した研修であった。ケニアで出会った出来事や人だけでなく、研修仲間を始めたくさんの出会いに感謝している。JICA の支援活動が単に技術や資金援助ではなく人づくりをしている場を訪問することが出来、感動した。

5 JICA に対する要望・提言

- 治安の不安定な状態での研修に、安全第一に配慮していただき、全行程の研修を無事に終えることができたことに感謝している。しかし、街の様子や日常に触れるには、比較的治安のよい地方などで街歩きの時間があるとよいと思った。
- 事前・事後研修を含め経験者による授業づくりのアドバイスは大変参考になった。事前における研修のポイントや心構え等は大変役に立った。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 学校訪問の折、現地の子どもに聞いてみたいことなどは考えて準備していたが、逆に日本について質問された時に、子どもの様子などの写真や地図などを用意していたらよかったと思った。
- 現地の子どもとの交流には、一緒に歌を歌ったり、スポーツをしたりすることが一番だと思った。言葉は必要なく共に笑顔になれた。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月25日(木)	JICA ケニア 事務所訪問 ナイロビ国立博物館視察	○ケニアの現状などを聞いたり、日本との関わりを知ることができた。JICA 事業が技術支援や資金提供だけでなく人を育てていることを理解し、とても感動した。 ○首都ナイロビは、近代化が進み大きなビルなどが立ち並んでいた。博物館では、ケニアの歴史や自然について学ぶことができた。
7月26日(金)	長崎大学熱帯医学研究所 ケニアプロジェクト拠点 訪問 ゲタスル更生学校での青年海外協力隊古賀隊員(青少年活動)の活動視察	○2005年設立の研究施設。熱帯病の研究、湖水の純化管理や病名診断キットの開発などを行っていた。そして、それらの研究を通して現地の人たちに就労の機会を与えていた。日本や世界の技術をもってすれば救える命がたくさんあることを実感した。 ○罪を犯した子どもたちの収容所。集団生活やスポーツを通して生活指導やマナー指導をしていた。教育を受けていない子どもの現状、貧困の中で生きる子どもの姿を見て、改めて日本の教育制度の素晴らしさを感じた。子どもたちの教育は大変重要だと思った。

日 時	訪 問 先	所 感
7月27日(土)	<p>指圧マッサージのデモン ストレーション体験 (青年海外協力隊清水隊員 (鍼灸マッサージ師) の活 動先卒業生による)</p> <p>セーブ・ザ・チルドレン・ センター訪問</p>	<p>○指圧の技術を身に付けることにより、各々が生きる喜びを感じているのが伝わってきた。「感謝されることがうれしい」という言葉が、「技術を教え、働く喜びを感じてもらおうこと」と言う本当の支援の真髄がここにあると感じた。</p> <p>○スラムの母親たちの自立支援や孤児院の運営に奮闘する姿に感動した。技術を身に付け、作品づくりを通して自立に向かわせる支援活動は本当にすごいことだと感じた。</p> <p>※教育の質を上げるためには、先生の質を上げること。働く条件を整え、良い人材を確保すること。よい教育がおこなわれるようになれば子どもの教育が進み、国の発展に結びつく。よい教師の育成が急務。</p>
7月28日(日)	ナイロビ国立公園視察	○広大な自然の中、果てしなく続く水平線に地球は丸いことを実感した。たくさんの動物との出会いは、刺激的でした。貴重な体験ができた。
7月29日(月)	<p>長崎大学ビタ拠点訪問 ・教育局訪問 ・初等学校視察 ・中等学校視察 ・保健局訪問 ・診療所視察 ・民家視察</p>	<p>○学校訪問では、設備の整っていない校舎で、学ぶ姿や屈託のなく笑う子どもたちの笑顔に癒され、勇気と元気をもらった。</p> <p>○草の根運動に感動した。地道な取組みは、将来きっと素晴らしい組織的な仕組みになるであろうと感じた。</p> <p>○地方の民家などを訪問し、庶民の生活に触れることができてよかった。</p> <p>○トイレや水事情、街中のゴミなど公衆衛生への取組みが進み、街が整備されることが暮らしを営む上で緊急の課題だと感じた。</p>
7月30日(火)	<p>セコ女子中等学校での青年海外協力隊荒巻隊員(理数科教師)の活動視察</p> <p>土のう事業視察・初等学校訪問 (NPO 法人道普請人)</p>	<p>○学校には、明るく一生懸命に学ぶ生徒の姿があった。荒巻隊員との関係がよく、日本への興味関心も深く、一緒に学びながら互いによい時間を過ごしていることを羨ましく思った。学校挙げての歓迎は、JICA 支援への感謝の気持ちであると感じた。</p> <p>○土嚢事業は大変感動した。“道づくりは人づくり”という言葉が印象に残った。技術を身に付けた若者が会社を設立、自立の道を進んでいる。道のできた集落の人々に感謝されることにより、働く喜び、生きる喜びにつながっていた。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(水)	CEMASTEIA 訪問 (理数科教育強化計画プロジェクト) 一村一品活動グループ視察(一村一品サービス改善プロジェクト)	○理数科の学力向上のための SMASE、授業改善のための教員の指導力向上のための研修施設。子どもを育てるためには、教員の授業力向上、研修は必要なことであり、よい教育には良い教師を育てることだと実感した。 ○一村一品活動の目的は、自主自立、ローカルにしてグローバル、人材育成だと知った。この活動を通して、女性たちが人と交わり、他の情報を得たり、街まで行く機会を得たりと女性の社会進出にまで役立っていることに感動した。
8月1日(木)	モヨ・チルドレン・センター視察 NPO 法人アマニ・ヤ・アフリカ視察	○松下照美さんとの出会いに感動。彼女のパワーに圧倒され、このエネルギーの源は何かと知りたくなった。ストリートの子どもの支援や貧しい子どもの学資支援などを行っていた。「一生懸命考えて行動すること、ベストを尽くして失敗したことは大丈夫、いい学校に行くことが幸せではない、好きなことを見つけよう」という日本の子どもたちへのメッセージが印象に残った。 ○障害者の自立支援のための職業トレーニング施設。電気のない工房には、足踏みミシンが3台あった。障害者の方々が、技術を身に付け、自立できている喜びを感じた。生活自立支援が人々の笑顔を生んでいた。
8月2日(金)	マーケット視察 青年海外協力隊豊田隊員(野球)の活動視察	○たくさんのお土産やマサイの人々との触れ合いが大変楽しかった。ケニアのお土産としての物はもちろん、教材に使えるような布や民芸品などもたくさん入手することができた。 ○ハイスクールの生徒50人余と広大なグラウンドで野球を楽しんだ。野球を通しての生活指導への取り組み。子どもたちとのスポーツ交流に言葉は必要なく、ともに笑顔で大変楽しい時間を過ごした。

学 校 名

福岡県田川市立金川中学校

氏 名

田 渕 歩

担当教科

英 語 科

1 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

- 日本に生きる子どもたちとケニアに生きる子どもたちの同じところ、違うところを見つける。
- 自分で見て、聞いて、感じたことを自分の言葉にする。
- 国際理解教育、開発教育と言われている教育をどのように実践していけば良いのか具体的なイメージを学び取る。
- 青年海外協力隊の方々がどのように活動されているのか現場を自分の目で見る。

2 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

<参考になったこと>

ケニアで経験したことをアウトプットさせる時にどのような手法を取れば良いのかを事前・事後研修で学ぶことができました。

<疑問に思ったこと>

ケニアやアフリカの歴史や経済発展の展望・先進国との関わりについてさらに詳しく知りたいと思いました。

3 教育指導への活用について

生徒に「幸せ」「貧困」「豊かさ」について考えさせていきたいです。また「当たり前」だと日本人が考えていることが実は「当たり前ではない」ということに気付かせていきたいと思います。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

事前・事後研修ともに大変充実した研修会でした。清田先生や森先生の実践を聞けたので今後の授業実践に向けて具体的にイメージしやすかったです。

またファシリテーター松本さんの進行の仕方が研修を受けてとても心地よかったです。松本さんのコメントも「そうかー、なるほどー！」と思わせてくれるような内容で大変勉強になりました。

5 JICA に対する要望・提言

ケニアでの研修は訪問先が多くて有り難かったのですが、少し詰め込みすぎではないかなと思えました。ケニアはナイロビで渋滞が激しく毎日時間がおしていました。1日を振り返る余裕が欲しかったです。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

ケニアに行く前はビオフェルミンを何日間か飲み続けて、胃や腸を鍛えておくと良いと思います。長時間のフライトのため体力をつけておかないといけないと思います。ケニアは標高が富士山の5合目位のところにあるので朝晩は本当に寒いです。油断せずに厚めの上着(パーカーやフリース)を持って行ってください。ビールを持って帰る時には必ず袋に入れてスーツケースに入れてください。トランジットの際に没収されます。どんな些細なことでもメモを必ずとってください。情報量が多すぎてすぐに忘れてしまいます。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月25日(木)	JICA ケニア 事務所訪問 ナイロビ国立博物館視察	< JICA ケニア事務所訪問 > ナイロビは危険がたくさん潜んでいるということを改めて知らされた。日本人は外に出るだけで目立っているということを認識してくださいと強く言われた。ケニア人は肌の色が黒いので、白い肌の私たちはどうしても目立ってしまう。財布は極力出さず、カメラも首からさげない方がいいという注意も受けた。また「なるほど」と思ったのは、私たちが何気なくしていることが、ケニア人に窃盗をさせてしまうような状況を作っているということ。例えばレストランで携帯電話をテーブルの上に置いておく等の行為は日本では盗難の被害には遭わないが、ケニアでは盗ってくださいというように捉えられることがある。日本人はケニア人に悪いことをさせてしまうような振る舞いをしないという視点に立てれば良いと思った。
7月26日(金)	長崎大学熱帯医学研究所 ケニアプロジェクト拠点 訪問	長崎大学の研究員の方々はとても丁寧に説明をしてくださって本当に有り難かったが、専門的な知識が多すぎて難しいと感じるところがたくさんあった。この日の訪問で学んだことは、ケニアでは熱が出るとマラリアだと診断されてしまうことが多いという

日 時	訪 問 先	所 感
	ゲタスル更生学校での青年海外協力隊古賀隊員(青少年活動)の活動視察	ことや、マラリア等の熱帯病は先進国にはない病気なので研究がなかなか進まないということも分かった。 <ゲタスル更生学校>古賀隊員が生き生きと楽しそうに仕事をされていたのが印象的だった。
7月27日(土)	指圧マッサージのデモンストレーション体験 (青年海外協力隊清水隊員(鍼灸マッサージ師)の活動先卒業生による) セーブ・ザ・チルドレン・センター訪問	<指圧マッサージ>視覚障害を持ったマッサージ師の方たちが「働くことが喜びだ」と話してくれたことに感銘を受けた。また協力隊の清水さんがおっしゃっていた自分が日本人であるということが営業をする上で優遇されるということが印象に残っている。 <マトマイニ>菊本さんのケニアの子どもやママたちに対する強い思いが話から伝わってきた。ものごとを計る尺度がケニアと日本では違っていても自分の中の日本人を振り返り、尺度を見直しているとおっしゃっていた言葉が印象深かった。
7月28日(日)	ナイロビ国立公園視察	12日間の中で一番ワクワクした。普段めったに見ることができないライオンやサイ等を見ることができた。ただトイレ休憩中に私たちのサファリカーにマントヒヒが入り込んできて、襲われそうになったことが忘れられない。
7月29日(月)	長崎大学ビタ拠点訪問 ・教育局訪問 ・初等学校視察 ・中等学校視察 ・保健局訪問 ・診療所視察 ・民家視察	初等学校へ訪問した際に子どもたちが踊ってくれた踊りが忘れられない。また校長先生たちが出迎えてくれるときにSODA(コーラやファンタ)でもてなしてくれる習慣が面白いなと思った。中等学校で生徒にインタビューをした時に「あなたにとって学校はどんな所か」という質問に対して「Make my future」と答えてくれたことに鳥肌が立った。
7月30日(火)	セコ女子中等学校での青年海外協力隊荒巻隊員(理数科教師)の活動視察 土のう事業視察・初等学校訪問 (NPO 法人道普請人)	<セコ>荒巻さんが生き生きと楽しそうに授業を行っている様子を見て、とても羨ましく思った。荒巻さんの影響が子どもたちにも先生たちにも伝わっていた。子どもたちが「ごきげんよう」と挨拶をしたり、日本の歌を歌ったりしているのを見て感じた。 <土のう事業>行けないと思っていたスラムへ訪問することができ、本当のケニアを見た気がした。ケニアで2番目に大きい小学校への訪問も子どもたちがたくさん寄ってきてくれて、自分が芸能人になったかの気分だった。しかしここへ通ってきている子どもたちは厳しい環境の中で暮らしている。そんな子どもたちはとても明るく人なつっこくてかわいらしかった。

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(水)	CEMASTEА 訪問 (理数科教育強化計画プロジェクト) 一村一品活動グループ視察(一村一品サービス改善プロジェクト)	<CEMASTEА> SMASEが目指しているものを実際に協力隊が行っている様子を通して見ることができた。少しずつではあるが、JICAが行っている事業を通してケニアの教育に変革をもたらしていると思う。<一村一品運動>協力隊が行っている内容としては「お金はあげない」「銀行でお金の借り方を教える」等の「自主自立」の精神でビジネスを教えることに感銘を受けた。「どのようにしたら付加価値のついた商品を作ることができ、儲けることができるのか」という事を考えさせ、様々な概念を伝えていく、まさに「人づくり」だと感じた。
8月1日(木)	モヨ・チルドレン・センター視察 NPO 法人アマニ・ヤ・アフリカ視察	<モヨ・チルドレンセンター>代表の松下照美さんは強い意志を持ってこの仕事をされているということを感じた。松下さんは私たち大人に「自分の生き様を子どもたちに伝えて!」とおっしゃっていた。自分の生き様について考える良い機会をいただいた。センターの子どもたちに見せてもらった部屋は、照美さんのしつけが行き届いていて、とてもきれいで日本の家の中を見ているようだった。特に子どもたちの服のたたみ方やベッドメイクの仕方など関心させられることばかりだった。<アマニ・ヤ・アフリカ>障害を持たれている方の職業訓練を行っていて、生徒さんが作ったバッグやペンなどを購入することができた。生徒さんの一人サミュエルさんが「自分の子どもには、自分と同じ人生を歩んで欲しくない」とおっしゃっていたのが印象に残った。
8月2日(金)	マーケット視察 青年海外協力隊豊田隊員(野球)の活動視察	<マサイマーケット>2番目にワクワクした場所だった。値段交渉がなかなか難しかったが、それを楽しみながら買い物ができる。あっという間の2時間だった。<豊田隊員(野球)>まず野球隊員という職種があるのかということが驚きだった。帰国したら野球部の生徒に伝えたいと思った。ケニアでは野球を教える以前の問題として「投げる」ということができない子がほとんどだということを知り、日本での当たり前がケニアでは当たり前ではないということに気付かされた。

学 校 名

福岡市立柏原中学校

氏 名

福 岡 弘 道

担当教科

社 会 科

1 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

- ケニア、アフリカを見て、感じて、様々な日本との相違点・共通点を見つける。ケニアから日本を考える。
- 社会科の教科書に載っている「アフリカ州」の実際の姿を、自分の目で確かめる。
- “Don't think. feel.” あれこれ考える前に、なんでも体験してみる。

2 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

とにかく今まで持っていたアフリカへの印象が一新された12日間だった。様々なケニアの姿にふれ、たくさんの人と交流する中で、毎日「知っていること」と「体験して得たこと」の質の違いを実感した。ケニアの人々は様々な困難を抱えながらも、生きる力と意欲にあふれていたし、日本との関係性を予想以上に見つけることができた。なにより、たくさんの日本人が生き生きと活躍している様子を知ることができた。ケニアを知ることによって、日本人の気質や、日本の良さについて再発見することができたと思う。

ケニアやアフリカへの関心も大幅に高まった。出国前、読んでもあまりピンとこなかった関連書籍の内容も、今ではリアリティをもって頭に入ってくる。自分にとってケニアが「遠い国」ではなくなったことを感じる。

ケニアでは毎日自分の価値観が揺さぶられ、変化していくのを感じた。帰国後は同じ教科書のアフリカ州の単元でも、全く違う内容感じ方をするようになった。なかでも衝撃的だったのが、社会科の授業でよく登場する「人口ピラミッド」の実態に触れたことである。日本の中学生に『アフリカの人口ピラミッドは、出生人口は多いが、多産多死型の「富士山型」です。15歳までに多くの子供が亡くなります。』と何気なく教えていたこのグラフだが、実際にケニアの小学生達（グラフの当事者達）とたくさん交流したことで、もう他人事のように教えることはできなくなった自分を感じた。またJICAの活動とは、現場を見るにつけて、それまでもっていた「資金や物資を援助」するODAのイメージとは違い、極めて教育的な活動であることが分かった。現地の人と一緒に汗を流しながら自分の持つ知識や技術を伝え、持続的な発展を目指すJICAの専門家や協力隊員の姿は、教育現場で働く自分達教師の姿と重なって見えた。国同士の、真のパートナーシップとは何か、考えさせられた。

3 教育指導への活用について

まずは学校生活の様々な場で、自分の経験を発信していきたい。教師自身が国際的な感覚を身につけることは、生徒に同様の感覚を身につけさせる際に大きな影響を与えると考える。実際、帰国後お土産のケニアシリング硬貨を配りながら、「ケニアに行ってきた」と話したときの生徒の反響は、思っ

たよりずっと大きかった。「将来英語を生かした職業に就きたい」と話す一方で、実際にネイティブスピーカーと話すとなると、しり込みしてしまう生徒も多い中、ケニアまで研修に出かけていく教師はよい意味で常識破りに見えたようだ。この研修で得た経験は、学習指導に限らず生徒指導、学校教育全体に生かせると感じている。

<教科指導 社会科>

○ 地理的分野

一学年の教科を受け持つと、「世界の諸地域 3 アフリカ州」の単元で、2学期ごろに教える。今年には特に福岡市の教科一斉研修の授業者になったため、ケニアで感じた多くのことをいかに学習指導要領や教科書とすり合わせて授業に盛り込むか、時間をかけて考えた。

教科書に沿って学習すると、ともすれば内容がアフリカ州の貧しさや政治経済の不安定さなど、負の側面に偏りがちだが、そこに「困難さを抱えながらも、可能性やエネルギーを秘めたケニアの姿」を盛り込むことで、ケニアを含むアフリカ州を多面的多角的に捉えさせたい。例えば、単元に貿易ゲームを盛り込んだり、JICAの活動、フェアトレードなどを調べたりしながら、日本とアフリカ州のより良い関係について考えさせ、公民科や道徳、総合学習などの学習につなげたい。

○ 公民的分野

三学年で学習する公民的分野では、「グローバル化」や「人権」、「国際理解」など、分野全体を通してケニアを使って授業をできる機会が多い。実際、二学期から日本の憲法や人権について学習する単元の中で、よくケニアを引き合いに出し、比較させている。

<道徳・総合学習>

異文化理解教育の視点から、自分と異なる立場の人々と、どううまく付き合っていくかについて学ばせたい。ここでは青年海外協力隊の活動がよい例として挙げられると思う。またこのテーマは、国際関係だけに限らず、広く他者理解にも応用できると考えている。生徒達は普段の学校生活で、ともすれば自分と考え方や容姿が違う相手をのけものにしたりからかったりしがちであるが、日本とケニアという大きな視点から見たとき、たいした違いではないことに気付く。相手を受け入れ、理解しようとし続ける姿勢を持たせ、思いやりのある集団づくりをしたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

約ひと月にわたる研修全体を通して、本当にたくさんのことを学び、良い刺激を受けました。機会さえあれば、また参加したいくらいです。

ケニアに行ったことで、また日本の違った面が見えてきて、自分の視野が広がったのを実感します。教育現場で実践したいことの方向性も見えてきました。

一方でこの研修の認知度が、身近な教員の間であまり高くないことにもったいなさを感じます。意欲的な多くの先生方に勧めていきたいと思えます。

5 JICA に対する要望・提言

安全を最優先していただいたおかげで、怖い目にあうことも無く、また体調も崩さず研修を終えることができ本当に感謝しています。緻密に組まれたスケジュールからも、「これだけはケニアで伝えたい!! 持ち帰ってもらいたい!!」という、JICA の皆さんの思いが伝わってきて、「がんばらなきゃ!!」とやる気にさせられるのと共に、とてもうれしく感じました。

なにより大きいのが、この研修を通じてたくさんの人と知り合えたことです。研修がこれほど濃いものになったのも、たくさんの「気付き」があったのも、ひとえに参加者の皆さん、及び関係各位の方々のおかげだと思っています。また研修で生まれたご縁をいかして、今後の教員生活で何かと JICA や国際理解教育・開発教育に関わっていこうと考えています。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

現地で子供たちと交流できる機会が思っていたよりも多く、短時間で日本らしさを伝えられて、お互いに楽しめるネタを用意しておくんだっとな…と感じました。特にこれといったネタを持たずに行った自分の場合、ホテルのスタッフや小学生から、よく「僕の名前を漢字で書いてよ!! (マイケル→間居気留など)」と頼まれることがあったので、漢字翻訳を持ちネタにしました。非常に喜ばれたため、本格的な筆ペンを持っていけばよかったな…と、後々思いました。

また、写真や動画は可能な限りたくさん撮り、「これはいらないんじゃないかな…?」と思うような写真でも共有するのがいいと思います。同じ写真でも、どんな情報を引き出すかは見る人次第なので、思わぬ写真が誰かの授業の核になったり、中心教材になったりします。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月25日(木)	JICA ケニア 事務所訪問 ナイロビ国立博物館視察	○うわさに聞いていたナイロビの渋滞を体験できたことと、街路樹に止まっているアフリカハゲコウ（大きな鳥）に興奮した。渋滞の合間を縫って新聞などを売りにくる物売りの人に、日本との違いを感じたのもつかの間、車庫証明が貼られたままの日本の中古車が何台も走っているのを見て、意外な場所での日本との出会いに驚いた。 ○事務所では安全面などに関して入念なブリーフィングを受けた。治安の悪さはこの研修全体を通して実感することができたが、注意を促されたテロ組織「アル・シャバブ」の名前には、この日昼食をとったショッピングモール「Westgate」の名前と共に帰国

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>後再開することになる。</p> <p>○国立博物館の展示品は、紛れも無く一級品だった。考古学専攻の自分は、非常に興奮させられた。一方で、博物館教育の観点から、日本人が貢献できる余地が多くあるようにも感じた。</p>
7月26日(金)	<p>長崎大学熱帯医学研究所 ケニアプロジェクト拠点 訪問</p> <p>ゲタスル更生学校での青年海外協力隊古賀隊員(青少年活動)の活動視察</p>	<p>○研究所で、大変丁寧にプロジェクトの説明を受けた。自分が携わる研究の重要性を熱心に語る現地スタッフから、意気込みと誇りを感じた。また、戸籍もなく死亡理由も不明なまま、生まれ、死んでいく子供たちが多くいることを知った。</p> <p>○更正学校では、自分の方がまだ緊張した状態で、最初子供たちに腰が引けていたが、彼らのフレンドリーさに一気に距離が縮まった。</p> <p>ケニア全土から鑑別のために子供たちが送られてくる施設なのに、どう見ても設備・スタッフ共に足りておらず、ナイロビ市街地の豪華さとのギャップを感じた。</p> <p>様々なものが不足する中でも、どこか楽しそうなケニア人の先生と、なによりいきいきと(ほとんど完全に溶け込んで)活動している古賀隊員の姿が印象的だった。</p>
7月27日(土)	<p>指圧マッサージのデモン ストレーション体験 (青年海外協力隊清水隊員 (鍼灸マッサージ師)の活 動先卒業生による)</p> <p>セーブ・ザ・チルドレン・ センター訪問</p>	<p>○清水隊員がおっしゃった、ケニアで実感する「日本人であることの強み」という言葉が、心に残った。ケニア人がホテルやジムに指圧マッサージを売り込みに行っても門前払いを食らうばかりだが、日本人が行くとすぐに重役に会わせてくれる、という経験談は後々青年海外協力隊の活動意義について自分なりに解釈する助けとなった。生徒の皆さんの前向きな言葉も胸をうった。</p> <p>○菊本さんが熱く語るケニアの政治、経済の矛盾と困難さに胸をうたれた。教員と警官の給与の額が、スラムの貧困層と同じとは…。書籍では知っていたが、政治家の汚職や縁故主義が公然と放置されていることを実際に聞くと、やりきれない気持ちになった。</p> <p>大ヒットのぬいぐるみには本当に感心させられた。ただのスポンジと羊毛に、日本的なデザイン(日本人の知恵)が加わると、大きな価値が生まれるということ、これが付加価値なんだな…と実感した。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
7月28日(日)	ナイロビ国立公園視察	<p>○冷たい雨が降り、「バッドコンディションだよ。」とドライバーさんが言っていたにもかかわらず、ほとんどのメジャーな動物にあえて、本当にうれしかった。動物の写真を撮るとき、背景にナイロビの町並みが写っていて、このコントラストがケニアという国を表しているのかな…などと考えた。</p> <p>○キスム空港からビタ拠点までの移動が最高に楽しかった。ナイロビとは一転して、伝統的な家屋や水汲みに行き来する子供など、思い描いていたアフリカの風景が広がっていた。</p>
7月29日(月)	長崎大学ビタ拠点訪問 ・教育局訪問 ・初等学校視察 ・中等学校視察 ・保健局訪問 ・診療所視察 ・民家視察	<p>○初等学校の生徒達の無邪気さと、彼らが使っていた短くぼろぼろな鉛筆、中等学校の黒板に書かれていた「Education is a key to succeed.」の文字と、彼らが語ってくれた夢。どれも日本に帰って伝えたいものばかりだった。</p> <p>○保健局の方がおっしゃった、「ケニアでは多くの子供がマラリアなどで命を落とすが、日本では多くの人が自殺で命を落とす。ケニアには自殺をする人はいない。」という言葉が胸に響いた。</p> <p>○伝統的な家屋はとても印象的だった。時間が押す中、なんとか訪問させていただいて、長大スタッフの皆さんに本当にありがたかった。</p>
7月30日(火)	セコ女子中等学校での青年海外協力隊荒巻隊員(理数科教師)の活動視察 土のう事業視察・初等学校訪問 (NPO 法人道普請人)	<p>○あまりに生き生きと生徒と接している荒牧隊員を見て、果たして自分はいくらまで愛情と情熱をもち、日々生徒達と接しているのだろうか、と振り返らずにはいられなかった。素直にうらやましいと思った。もし「海外でがんばっている日本人を紹介しろ。」といわれたら、自分は荒牧隊員を推すだろう。</p> <p>○スラム訪問はショッキングだった。住んでいる人たちが本当に自分たちのことを不幸だと感じているかは別にして、子供たちが、汚水が流れる中をサンダルで歩いたり、学校に行けずシンナーを常習したりする環境は、改善されるべきだ。土のう工法の道作りという活動は、確実にスラムの生活環境・雇用環境を変えているように思えた。</p>
7月31日(水)	CEMASTEIA 訪問 (理数科教育強化計画プロジェクト)	<p>○「研修」という、自分にとって当たり前のシステムが、ケニアでは最近になって導入され、理数科教員を中心に授業力向上の輪が広がっていることを知った。公立学校が劣悪な学習環境のまま、また教師の給与が貧困層と同程度なまま放置されている一方で、教育の質を向上させる取り組みが少しずつ進んでいることに希望を感じた。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
	一村一品活動グループ視察（一村一品サービス改善プロジェクト）	○社会科の教科書でいう、「モノカルチャー経済」からの脱却と、「フェアトレード」の実態を見ることができた。一次産品にいかにか付加価値をつけ、生産者団体が経済的に自立していくか。日本発祥の一村一品運動のノウハウによって、少しずつ実現しているのを知った。
8月1日（木）	モヨ・チルドレン・センター視察 NPO 法人アマニ・ヤ・アフリカ視察	○手を引いてセンターの中を案内してくれる、子供たちの無邪気な顔からは、とても彼らの壮絶な過去や家庭環境をうかがい知ることはできなかった。 センターの随所に松下さんが伝えた「日本らしさ」が感じられた。日本的な整理整頓、衛生管理の考え方が生きていた。 ○代表の石原さんが話されるケニアの現状（絶対的貧困、政治の腐敗、先進国による搾取、貧富の差など）に著しく気分が沈んだが、一方で計り知れないケニアの抱える課題の大きさに気づかされた。毎日様々な困難さと向き合っているからこそそのコメントだと感じた。
8月2日（金）	マーケット視察 青年海外協力隊豊田隊員（野球）の活動視察	○自分の中学校では野球を含めて運動部がさかんだ。そんな勤務校の生徒達に一番紹介したかったのが、この豊田隊員の活動である。3年生の学級で豊田隊員とケニアの生徒たちが野球をする様子を動画で見せたとき、日本から遠く離れたケニアで野球を広めようとしている人がいることに驚いたようで、生徒の何人かは「あの人（ケニアの生徒）達と、野球がしてみたい。」と素直に語ってくれた。

学 校 名	熊本市立二岡中学校		
氏 名	岸 森 布美子	担当教科	英 語 科

1 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

- 実際に見て、現地の人と話をし、感じることで、ケニアという国について知ること。
- 開発途上国で国際協力に携わっている日本人の活動や思いを知ること。
- 日本の学校の子どもたちに異文化理解や、国際協力のきっかけを持たせられるようなヒントを見つけること。

2 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

全ての訪問先が勉強になりました。中でも特に、学校や子どもに関係がある機関への訪問は、考えさせられることが多かったです。教員として、子どもたちと関わりながら過ごしているので、ケニアの学校の日常の様子や授業を見たり、生徒と触れ合ったり、先生方から話が聞けたことは個人では絶対に体験できない貴重な機会だったと感謝しています。また、JICA 事務所の方を含め、ケニアで活躍する協力隊員などの日本人の姿にとっても感銘を受け、私自身ももっと頑張らなければ、という気持ちになりました。

3 教育指導への活用について

担当する英語の授業中だけでなく、道徳や学活の時間にも、開発途上国の現状について話をしたい。たくさんの写真も、実際に自分の目で見たものばかりなので、1枚の写真に対しても、多くの思いを持って話をすることができます。すると生徒の興味の示し方も違うようです。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

現地では、毎日のスケジュールがぎっしりでしたが、欲張って色々なところに行けたことは本当に良かったと感じます。日頃はあまり接点がない県外の様々な校種、教科の先生方と一緒にいろんな視点から話ができただけでも新鮮でした。事前事後研修は、学校の仕事の合間を縫っての参加になるため、厳しい気もしましたが、やはり研修後は「勉強になった！」という大きな充実感を感じていました。研修全体の内容が良く練られていると思います。

5 JICA に対する要望・提言

このような機会を与えて下さったことに心から感謝しています。この研修がもっと学校現場の先生たちに知られると良いと思いました。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

現地訪問をする前に、「これだけは見るぞ、聞くぞ」という目標を持っておくと良いと思います。現地研修中は、スケジュールがぎっしりで忙しいですが、メンバーでちょっとでも時間を合わせて、振り返りや翌日の訪問先の予習を一緒にしておくと、また学びが深まるように思いました。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月25日(木)	JICA ケニア 事務所訪問 ナイロビ国立博物館視察	車窓や JICA ケニア事務所から見たナイロビの景色が忘れられない。大渋滞、その中で物を売り歩く大人や子供、歩いて仕事場に向かう人の波、高層ビル、奥に広がるサバンナ地帯、建設ラッシュ、大きな鳥、道端に座っている人、道路脇の家具屋さんや洋服屋さん…。日本とは全く違う風景に圧倒された。ケニアの治安について話を聞き、緊張感を覚えたが、博物館で目にした子どもたちの明るい表情が印象的だった。
7月26日(金)	長崎大学熱帯医学研究所 ケニアプロジェクト拠点 訪問 ゲタスル更生学校での青年海外協力隊古賀隊員(青少年活動)の活動視察	福岡でお会いした風間さんにナイロビで再会できたことに感動した。事前研修で聞いていたことを実際にケニアのプロジェクト拠点で見せていただいて理解が深まった。日本から遠く離れた国で、熱帯病の研究をしている日本人がたくさんいることに驚いた。 更生学校では、校舎も教材も立派ではないが、大切にされている。日本からの届けられたサッカーボールとシューズが喜ばれていることを知り、「小さなつながり」が大きい意味を持つことを実感した。ケニアでの初めての子どもたちとの交流はドキドキしたが、純粋に紙飛行機で遊んだり、一緒に歌を楽しむ姿に日本人と変わらない子供らしさを感じた。英語で十分にコミュニケーションをとれる英語力を持っているところもすごいと思った。

日時	訪問先	所感
7月27日(土)	指圧マッサージのデモン ストレーション体験 (青年海外協力隊清水隊員 (鍼灸マッサージ師)の活 動先卒業生による) セーブ・ザ・チルドレン・ センター訪問	ケニアでの障がい者の生き方や学校制度について 知ることができた。指圧の技術を身につけた3人の セラピストは働ける喜びを持っていると感じた。ま た、清田隊員の情熱と、行動力にも圧倒された。日 本とは全く異なる環境の中で、協力隊員として活動 している人たちは少々のことでは折れない強い信念 を持っていると感じた。 SCCの菊本さんの強さにも感動した。ゼロから施 設を作り、孤児院を作り、ママさんの自立支援の形 を探り続けている力はどこから生まれてくるのだろ うと思った。菊本さんから聞いたケニアの教育界の 問題は、日本の教育界の問題にも通じるところがあり、 人ごとには思えなかった。
7月28日(日)	ナイロビ国立公園視察	アフリカといったら「動物」というイメージを持 つ日本人は多いと思うし、私もその一人だった。短 い時間だったが、サファリに行けたのは感動的だっ た。あいにくの天気で、想像以上の寒さだったが、 テレビで見たサファリツアーでたくさんの動物を見 ることができて本当に良かった！
7月29日(月)	長崎大学ビタ拠点訪問 ・教育局訪問 ・初等学校視察 ・中等学校視察 ・保健局訪問 ・診療所視察 ・民家視察	ナイロビとは全く違う村の風景に感動した。ビタ で再び風間さんに案内していただいたことがうれし かった。日本にはあまりなじみのない熱帯病につい て、日本人がケニア人と協力して研究をしたり、草 の根で地域に貢献していることに驚き、感心した。 診療所の環境も衝撃的で、保健衛生に関しては、ケ ニアは絶対的な改善が必要だと感じた。ビタの人た ちや子どもたちとたくさん交流する時間をもらった おかげで、ケニアの人たちの明るさ、親切さ、熱心 さを感じ、ケニア人に対する印象が変わったように 思う。また、2校の学校訪問で、トイレや校舎、教材 が不足していることを目の当たりにし、日本の「普通」 がどれだけ恵まれたことなのかを実感した。
7月30日(火)	セコ女子中等学校での青 年海外協力隊荒巻隊員(理 数科教師)の活動視察 土のう事業視察・初等学 校訪問 (NPO 法人道普請人)	エルドレッドへの長い道のりの風景全てが魅力的 だった。赤道に立った時の感動は一生忘れない。 荒巻隊員の活動する学校の生徒たちの学習意欲に 感銘を受けた。反応、集中力、やる気、将来への希 望…日本で日頃私が接している中学生にあまり感じ られなくなった生きる力をとても感じた。荒巻さん 自身もとても生き生きと授業をされていて、まずは 私自身の姿勢を振り返る必要があると思った。もう 少しゆっくりと学校の中や、授業の様子を見たり、 先生たちと話をする時間があると良かった。

日時	訪問先	所感
		<p>道路づくりを通じて、ケニアの若者たちが自立していくという活動に日本人が関わっていることに驚いた。スラムの様子を実際に見ることができたのも良かった。民家、子どもたちの姿、散乱するごみ、シンナー…色々と考えさせられた。北さんが案内してくれた小学校訪問もとても衝撃的だった。子どもたちの生き生きした表情と子供らしい人懐こさ、行動に心が動かされた。</p>
7月31日(水)	<p>CEMASTEIA 訪問 (理数科教育強化計画プロジェクト)</p> <p>一村一品活動グループ視察(一村一品サービス改善プロジェクト)</p>	<p>私自身、教員研修に興味を持っており、SMASEの活動内容はとても興味深かった。国を発展させるためには教育に関わる人をどのように育てるか、という視点は欠かせないと思う。JICAの支援活動が、協力隊などの地域に根差した草の根の活動と同時に、ケニアの教育界の教員養成という大きなカテゴリーにも関わっていることに感心した。</p> <p>OVOPの取り組みは、物資や金の支援ではなく、地域の人が地域のモノを使ってお金を稼ぐシステム作りの支援、という視点が新鮮だった。ビジネスを自分たちでできている、という地域の人たちの自信と誇りがとても伝わってきて、応援したいと思った。</p>
8月1日(木)	<p>モヨ・チルドレン・センター視察</p> <p>NPO法人アマニ・ヤ・アフリカ視察</p>	<p>MCCの松下さん、アマニ・ヤ・アフリカの石原さん、お2人の活動に対する情熱に感動した。ストリートチルドレンの子どもたちやケニアの人々の生活の現状を聞くと、本当に胸が痛んだ。しかし、様々な事情が絡み合っていて、奥深い課題があるケニアの中で、人々を支援しようと、ゴールの見えない環境の中で活動をされている松下さんや石原さんの情熱の源は私には想像できなかった。同じ人間として生まれても、生まれた場所が違うだけで「差」ができる現実に大いに考えさせられた。MCCの子どもたちはとても親切で気遣いができ、日本への興味を持っていた。日本の子どもたちとの交流の機会ができれば、互いにどんなに刺激を受けることができるだろう、と思った。</p>
8月2日(金)	<p>マーケット視察</p> <p>青年海外協力隊豊田隊員(野球)の活動視察</p>	<p>マサイ・マーケットは活気があってとても面白かった。もう少し時間がほしかった。</p> <p>豊田隊員の野球指導の様子は、とても心が和んだ。広い大地、広い空の下で、道具は不十分でも男女関係なく本当に野球を楽しんでいることが伝わってきた。スポーツは、たとえ言葉が通じなくても、世界中の人がコミュニケーションを図れるひとつの貴重な手段になると感じた。</p>

学 校 名

宮崎県立赤江まつばら支援学校

氏 名

小 坂 征 史

担当教科

英語（中・高）他

1 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

- 幼小～高等部まで幅広く活用できる教材収集に努めること。
- 1つの事象を歴史、政治経済、文化、医療・科学など多角的に検討し吸収すること。
- 「(国際)理解」とどまらず「活動、アクション」につなげるものを探り身につけること。

2 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

第1に支援には様々な形があるということです。視察を通して、JICAを含む日本の支援はニーズと将来像の両方を考えて慎重に実施しようとしている印象を受けました。第2にスポーツの持つ教育力です。サッカーと野球の指導者の話を直接うかがい、練習や競技を通して、言葉だけでは伝わらない多くのものが育成されるということを知ることができました。第3に多部族・多言語の素晴らしさと難しさです。教育の困難、貧困等の一因ではあるが、多様性が産む芸術的豊かさ、人のつながりの強さなどの魅力を知ることができました。最後に疑問として、教育制度です。イギリスから「輸入」されたシステムはケニアの実情には合っていないと感じました。独立から60年が経過しますが、システムの入替えの難しさかなと感じました。

3 教育指導への活用について

共有した写真・動画を対象となる児童・生徒に合わせて選び、組み立て活用する。これらを深め発展させるために、今回視察に行った私自身のエピソードや交流した方々の声などを加えたい。理解から行動につなげるために、現在行われている支援とその目的を紹介し、その目的達成に（間接的にも）個人として参加・寄与しているかを考えさせたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

1回目のケニア研修ということで、ぎりぎりまでスケジュール調整をしていただき、その熱意に心を打たれました。どの視察場所も学ぶものが多く、思い出深いものとなりました。ニュース、ネット上の写真や動画では伝わらない、体験、経験を組み込んだ授業をするなかで、また新たな発見、感動があると確信しています。その意味で「継続性」を大切に、「打ち上げ花火」に終わらない地道な取り組みを大切にしたいと思います。

5 JICA に対する要望・提言

事前、事後の研修は参加者がお互いを知り、得たものを共有するためにとっても有効でした。事後研修での「授業づくり」は個別で1人10～15分程度のミニ授業の方がよいと思います。学校事情も異なりますし、何より授業後のコメントが個人に直接届き、現場に帰っての授業づくりがとてもしやすくなるはずで

す。視察先にはぜひ通訳の手配をお願いします。視察先によっては専門性が高く説明の理解に苦しむ場面が見られました。質問もしにくく、交流が難しい場面がありました。また、「言語の壁」が低くなると応募者も増え、様々な校種、教科の先生方に門戸が開かれるものと考えます。

夕食・懇親の前に「ふりかえり」の時間が確保されると理解・共有がさらにすすみよかったですのではないかと思います。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 派遣前に授業のイメージを持っておくこと。これにより欲しい写真、動画、その他が決まり、現地で活動しやすくなります。
- 現地でしか手に入らないものをまめに収集すること。(紙幣、硬貨、切手、新聞、地図、飲み物のラベルなど) その場では「ごみ」でも持ち帰ると貴重な資料になります。
- 現地で出会った人の名前を記録しておくこと。1日の記録を残すノート等を準備しておいてそれに直接書いてもらうのもいいかもしれません。話した人とは可能なら一緒に写真に収まってもらえると、帰国後、「〇〇(場所)で、〇〇(人名)さんと～をした、話した」と児童・生徒に紹介でき、自分しかできない授業コンテンツができあがります。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月25日(木)	JICA ケニア 事務所訪問 ナイロビ国立博物館視察	 正直、「ショーケースの入った倉庫」というイメージでした。「文化財保護」や「博物館教育」はこれからの課題だと思った。外国人は入館料が6倍だった。

日時	訪問先	所感
7月26日(金)	<p>長崎大学熱帯医学研究所 ケニアプロジェクト拠点 訪問</p> <p>ゲタスル更生学校での青年海外協力隊古賀隊員(青少年活動)の活動視察</p> 	 <p>「アフリカは熱帯病の宝庫」という言葉が印象的だった。基礎研究と並行して携帯端末を活用したアラートシステムや簡易診断キットなど防疫への支援が行われていることを知ることができた。</p> <p>スポーツのもつ教育力を知り、感動した。派遣されている古賀隊員から「初めは全員で1つのボールを追いかける？とりあう？ことから始まった。」と聞き、驚いた。裸足の子供も多く、古くなったサッカーシューズも子供たちにとっては素晴らしい贈り物となっていた。ボールを追う子供たちは生き生きとしていた。何ならかの罪を犯した子供たちが来る更生学校ということで、暗いイメージがあったが、一定の衣食住が保障されているためか、表情は明るかったのが印象に残った。</p> 
7月27日(土)	<p>① 指圧マッサージのデモンストレーション体験(青年海外協力隊清水隊員(鍼灸マッサージ師)の活動先卒業生による)</p> <p>② セーブ・ザ・チルドレン・センター訪問</p>	<p>①では「指圧」という技術指導だけでなく、ビジネスを開拓していく清水隊員のバイタリティーに感心しました。ドラッグや工業用アルコール飲用による後天的な全盲も少なくないとの話だった。旅の疲れがいやされた午前中でもありました。②では技術だけでなく、ビジネス・販路も同時に開発し、女性の自立を支援するという総合的な支援が印象に残った。</p>
7月28日(日)	ナイロビ国立公園視察	<p>方角によっては地平線が見えたり、高層ビル群が見える広大な公園でした。植民以前の風土を髣髴とさせるひと時でした。</p>
7月29日(月)	<p>長崎大学ビタ拠点訪問 ・教育局訪問 ・初等学校視察 ・中等学校視察 ・保健局訪問 ・診療所視察 ・民家視察</p>	<p>防疫のための衛生管理、そのための「手洗い」、「体を清潔に保つこと」が教育(教科書)に入っていました。学校は義務制である初等学校の設備が特に貧弱で、「義務教育」に対する国の姿勢を知りたいと思った。(予算の使い方は「無計画」という話も聞いた)看護師さんひとりで運営しなくてはいけない診療所では深刻な医師不足を感じた。民家では一夫多妻の実情を知ることができた。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
7月30日(火)	セコ女子中等学校での青年海外協力隊荒巻隊員(理数科教師)の活動視察 土のう事業視察・初等学校訪問 (NPO 法人道普請人) 	言語の使用割合が比較的少ない理数科ゆえ指導のしやすさを感じた。寄宿舎制の学校ゆえの躰のよさを感じた。  土のう事業は、道路=アスファルトではなく「ニーズに合わせたピンポイントの支援」を行っていた。「押しつけ」でない寄り添った支援が歓迎されている様子がわかった。
7月31日(水)	CEMASTEIA 訪問 (理数科教育強化計画プロジェクト) 一村一品活動グループ視察(一村一品サービス改善プロジェクト)	ここであらためて「教師の質」を向上させる必要性を知った。「理数科の次は？」の質問には「言語(英語)教育」と即答された。将来、関わる事ができたらと強く感じた。一村一品では付加価値をつけて販売するためのシステム作りが行われていた。原材料そのものを廉価で買い叩かれるのを防ぎ、「仕事作る」ことが貧困問題を解決する重要な方法の1つだとわかった。
8月1日(木)	モヨ・チルドレン・センター視察 NPO 法人アマニ・ヤ・アフリカ視察	「(子供は)仕事がない、お金を稼げないのだから節約(無駄なく使う)を徹底して教える」という指導方針が印象に残った。また、施設に引き取る優先順位として、「シンナーに手を出していない」という話があった。薬物の子供への広がりを知る事になった。 人のつながり、相互扶助の精神が強いゆえに、親戚で「収入のある人」に「たかって」しまう実態を知った。労働力足りうる「人づくり」が十分にできないケニアの現状と教育の大切さを再認識する事になった。
8月2日(金)	マーケット視察 青年海外協力隊豊田隊員(野球)の活動視察	マーケットは「交渉により変動する価格、物量」を体験することができた。野球は走者やバッターとして参加し、「言葉のいらぬ交流」を楽しむことができた。「楽しくないとやめてしまう。やはりバッティングが好きなので、バットに当ててあげる技術が必要」と楽しそうに話す豊田隊員の言葉が印象に残った。

学 校 名	鳳凰高等学校		
氏 名	上塩入 美 喜	担当教科	英 語 科

1 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

- ケニアの衣食住に触れ、ケニアという国の現状を知る
- ケニアの子どもたちと交流し、笑顔の源、夢や目標を知る
- ケニアで活躍する JICA 隊員や NGO の取り組みを知り、背後にある思いを知る
- ケニアから見た日本はどのような国なのかを探る

2 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

参考になったことは、ケニアという国を肌で感じ、たくさんのすばらしいところに気づけたところである。開発途上国というと、貧しい、かわいそう、という負のイメージが先行しがちで、その国の魅力に目を向けるところまで行き着かないことが多いように思う。事前のアドバイスもあり、意識して探すように心がけていたが、毎日たくさんの刺激を受け、感動することができた。たくさんの笑顔と出会い、子どもたちは夢にあふれ、大人たちは未来のために現状を改善しようと懸命だとわかった。もちろん、そうでない人もたくさんいるのだろうし、問題は山積みだが、貧困がイコール不幸ではないのだと実感できたことは収穫であった。

疑問に思ったことは、教育政策についてである。全国一斉学力テストが実施され、どの学校でもそのテストに向けて一生懸命取り組み、学歴重視の社会になりつつある一方で、学校の設置や先生の配置は地域や PTA が主導という現状に非常に驚いた。

3 教育指導への活用について

これまでも海外に行く機会があったが、授業中に教材とリンクさせて話題にすることはあっても、それを基に授業をすることまではできていなかった。この教師海外研修では、事前・事後研修までしっかりと用意されており、その後の授業実践へとつなげるための準備ができるため、参加できて非常によかった。

まずは総合的な学習の時間を使い、ケニアの現状を通して生徒達に「幸せとは何か」を考えてもらい、自身を見つめなおす機会を作ることができればと考えている。JICA デスクの方に協力を仰ぎ、出前講座も利用できればと考えている。また、英語においては、教科書にアフリカや児童労働を題材にした課があるため、ケニアでの経験をうまく利用して、内容を深く読み取らせたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

本研修の12日間、朝早くから夜までと非常にタイトなスケジュールで、時には辛いと感じることもあったが、個人の旅行では行けないところを訪問し、毎日新鮮な感動を味わうことができ非常に充実した研修を送ることができた。子どもたちとの交流を楽しみにしていたが、それ以上にケニアで活躍する青年海外協力隊の方々やNGOの方々に刺激を受けた。自分の使命に誇りを持って情熱を傾けており、非常にまぶしく見えた。

また、これまで遠い国であり、特別意識したことのなかったケニアを、研修を通して非常に身近に感じる事ができた。治安が悪く問題も多いけれど、よいところもたくさんある。それは見ようとして初めて分かることだと実感した。

普段英語を教えていて、苦手意識が強く、英語を学ぶ意義を見出せない生徒達からよく不要だという声が挙がるが、それも身近に感じられたら違うのではないかと改めて考えさせられた。ケニアでの研修で得たことを生徒達に還元していきたいと思う。

最後に、同行して下さった松尾さん、安部さんをはじめ、JICA九州、ケニアの事務所の方々には本当にお世話になりました。全員無事に研修を終えて帰ってくる事ができ、とても感謝しています。ありがとうございました。

5 JICA に対する要望・提言

今回、最初と最後がナイロビで、途中ビタに行ったが、1泊では短いと感じた。田舎であれば、治安面でもそれほど問題がないということだったので、もう1日増やし、実際に街を歩いてみる事ができればよかったと思う。

本研修中は、朝早くから夜までスケジュールが組まれており、なかなか振り返る時間がとれなかった。夕食の前に振り返る時間を取るか、もう少し早めにホテルに到着できればと思った。

公用語が英語であり、学校での交流では支障なかったが、研究に関すること等専門分野の説明は非常に難しく、補足説明をしてくださる方が必要だと感じた。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

事前にアンケート項目を決めておき、現地と日本の回答を比較すると面白いと思う。

英語はできるに越したことはないが、加えて現地の言葉での自己紹介ができるとよいと思う。

可能であればPCを持参すると、振り返りがしやすいのではないかと考えた。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月25日(木)	JICA ケニア 事務所訪問 ナイロビ国立博物館視察	オフィスでのブリーフィングで、JICA の支援について説明を受け、これからの視察へ期待が高まった。博物館は、外国人の入場料の高さに驚いたが、170 万年前のヒトの全身骨格である「ツルカナボーイ」を見ることができ、またケニアの歴史に触れることができよかった。
7月26日(金)	長崎大学熱帯医学研究所 ケニアプロジェクト拠点 訪問 ゲタスル更生学校での青年海外協力隊古賀隊員(青少年活動)の活動視察	プロジェクトが大きく2つあり、病気を迅速に診断できるキットの開発、そして情報を収集したり、通知したりできる中央と地方をつなぐシステム作りに取り組んでいることを知った。先進国にはない病気であり利益も見込めないが、誰かがやらねばという思いを持って取り組んでいることを聞き、胸が熱くなった。 古賀隊員は、罪を犯した少年たちが3ヶ月間生活する更生学校で体育(サッカー)を教えている。学校のスタッフが熱心に説明してくださったため、古賀さんの話はあまり聞けなかったが、サッカーを通して心を育てようとされていることが伝わってきた。
7月27日(土)	指圧マッサージのデモン ストレーション体験 (青年海外協力隊清水隊員 (鍼灸マッサージ師)の活 動先卒業生による) セーブ・ザ・チルドレン・ センター訪問	清水隊員は、視覚障害を持つ生徒達に日本式指圧マッサージの技術を取得させ、卒業後はホテル等と契約して仕事を得て、自立へと促している。隊員が活動の域を越えて方々まで営業をして契約を取り、生徒達がより自立へと進むようサポートをしており、その熱い思いに感激した。 SCC は、代表の菊本さんが孤児院からスタートし、子どもを救うには母親の自立が必要だと職業訓練校を開いた。現在はぬいぐるみが大ヒットし、成功して収めているが、一方でケニア人との尺度のずれに苦戦したり、強盗の被害に遭ったりと苦難の連続だそう。しかし、女性達は職人として誇らしげに作業しており、菊本さんの強い思いはきっと通じるのではないかと思った。

日 時	訪 問 先	所 感
7月28日(日)	ナイロビ国立公園視察	ケニアといえばサバンナを駆け回る動物たちのイメージがあったので、行くことができてとてもよかった。国立公園の中では非常に小さいということで、象がいないのはとても残念だったが、たくさんの動物に会えたこと、動物越しに高層ビル群が見え、大都会の真ん中にあるのだということを実感し、大満足だった。
7月29日(月)	長崎大学ビタ拠点訪問 ・教育局訪問 ・初等学校視察 ・中等学校視察 ・保健局訪問 ・診療所視察 ・民家視察	ビタを訪問して、ようやく思い描いていたアフリカに出会うことができた。 移動中、どこへ行っても道の傍らには子どもの姿があり、日本との違いを実感して驚いた。 学校を2校訪問したが、公立の学校でも国ではなく地域が建てており、校舎が間に合っていなかったり、先生をPTAで雇っていたりと日本では考えられない状況に驚いた。 診療所ではJICAの支援によりソーラーパネルが付いたことで夜間の出産等にも対応できるようになっており、非常に助かっていることがわかった。
7月30日(火)	セコ女子中等学校での青年海外協力隊荒巻隊員(理数科教師)の活動視察 土のう事業視察・初等学校訪問 (NPO 法人道普請人)	荒巻隊員は、理数科教師として活動をしており、生徒から慕われ、先生方からの信頼は非常に厚いようであった。日本の理数科教育が認められているのだということを実感できた。 土のうによる道直しのプロジェクトで、トレーニングを経て株式会社を立ち上げた若者達が実際に活動している様子を見学した。場所がスラム地区だったため一瞬緊張したが、若者達の活躍により、英雄のように見られ、とても好意的に受け入れられていた。支援の大成功の例だと思った。 また、ケニアで2番目に大きいという初等学校を訪問することができ、熱烈な歓迎をしてもらい、スター気分を味わうことができた。建物の粗末さに驚いたが、子どもたちの笑顔はここでも輝いていた。
7月31日(水)	CEMASTEIA 訪問 (理数科教育強化計画プロジェクト) 一村一品活動グループ視察(一村一品サービス改善プロジェクト)	ケニアでは、どの教科も一方的な講義式の授業のため、それを改善すべく、先生方へ研修で実験などしてもらおうことで、授業改善につなげてもらうというプロジェクトである。日本の理数科教育が認められていることを知り、非常にうれしく思った。 一村一品活動の視察では、説明が延々と続き、上記の講義式授業の改善がいかに必要かよくわかった。ケニアで実際に活動をしているグループを更に発展させるための支援であり、努力しているグループがいることが分かってうれしかった。

日時	訪問先	所感
8月1日(木)	<p>モヨ・チルドレン・センター視察</p> <p>NPO 法人アマニ・ヤ・アフリカ視察</p>	<p>モヨ CC では、日本式のしつけが徹底されており、靴はそろえられ、衣服はきちんと畳まれ、部屋がとてもきれいで驚いた。ゲタスルを訪れた際、しつけをするのが非常に難しいと聞いていたので、松下さんの尽力の成果だと感動した。</p> <p>アマニやアフリカでは、他の視察場所と異なり、支援していくことの難しさや厳しさばかりを聞くこととなったが、これがケニアの現実なのだと痛感した。しかし、ケニア人スタッフは、子どもの将来が明るくなるようにと必死に働いており、そういう人がもっとももっと増えれば変わっていくのではないかと思った。</p>
8月2日(金)	<p>マーケット視察</p> <p>青年海外協力隊豊田隊員(野球)の活動視察</p>	<p>店員の呼び込みが盛んで初めは少し怯んだが、すぐに慣れて値段交渉を楽しむことができた。日本製のペンなどが値段交渉の際有利に働いたので、面白かった。</p> <p>豊田隊員の活動は、学生達に野球を教えることで、視察では実際にプレーをしてもらった。野球を楽しむことに重きを置いているようで、学生達は伸び伸びとプレーしていた。しかし、エラーをすると罰で腕立て伏せをさせており、笑いを誘っていた。私は体調がすぐれず見学のみだったが、他の先生方は一緒にプレーをしており、楽しそうだった。</p>

学 校 名

鹿児島聾学校

氏 名

益 田 寛 子

担当教科

小学校全科

1 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

- 生活環境の違いを知る。(住居、食事、衣服、学校、電気、水道など)
- 同じ障害を有する仲間が世界中の他の国にもいることを知る。(手話を使っていること)
- 動物園以外の草原に動物が住んでいることを知る。

2 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

卒業生のインタビューでは、「『自立』したいから指圧コースを選んだ。」とあった。日本では、同じように障害があっても自立に重きを置くことも少なく、自立できない時の差を身にしみて感じることは少ない。子どもに置かれた環境の違いとは言え、他のことでも夢中になり、必死になるものが日本の子どもたちにも見つければ…と思う。また、環境の悪い道路を歩く姿は日本には無い力強さ・逞しさを感じた。

3 教育指導への活用について

新しい見聞を広げ、世界の中には日本とは様々な面で大きく違う国があることを知らせる。アフリカのケニアも、聴覚障害者はいるということ。また、その人たちは同じように手話を使っていること。遠い国にも同じような仲間がいることを知り、より身近に感じて欲しい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

行ってみて、改めて個人では行けない場所だと治安の面や交通機関などを通じて感じた。安心して食べられる食事とゆっくり寝ることができる場所が一日中緊張している中だったので、本当に有り難かった。

5 JICA に対する要望・提言

今回、参加させていただき本当にありがたかったです。綿密な計画と行った先でのガイドなどマーケットの時間がもう少し欲しかったです。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

体力が要る研修です。途中で写真に疲れて撮らなくなったりするが、後で教材としてあの雰囲気、あの物の写真が欲しかったと思うことがありました。授業を想定して、どんな場面で、どんな様子の写真を撮りたいと考えて行った方が教材として使いやすいと思います。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月25日(木)	JICA ケニア 事務所訪問 ナイロビ国立博物館視察	ナイロビ国立博物館：ケニア内でも観光客の扱い（居住者と観光客の料金の差）を目の当たりにした。渋滞で売る新聞屋、密集して乗っているマタツ、市場や道端でのんびりしている人の多さ、ナイロビでの日常風景が日本とは違い背景や理由を移動中に聞きながら移動した。
7月26日(金)	長崎大学熱帯医学研究所 ケニアプロジェクト拠点 訪問 ゲタスル更生学校での 青年海外協力隊古賀隊員（青 少年活動）の活動視察	長崎大学：マラリア蚊の研究で地域によって採取した蚊の分析を見学。現地の研究生の活躍。 更正学校：初めての交流。学校の雰囲気や施設の内容や子どもたちが入所するまでの経緯を聞き、更に緊張した。気にするあまり、なかなか打ち解けずいた。紙飛行機作りで、話ができ、背景などを気にしすぎていたことに気付く。
7月27日(土)	指圧マッサージのデモン ストレーション体験 (青年海外協力隊清水隊員 (鍼灸マッサージ師) の活 動先卒業生による) セーブ・ザ・チルドレン・ センター訪問	指圧体験：活動内容や視覚障害者の生活なども聞いた。清水隊員の卒業生への言葉掛けや細やかな配慮が印象的だった。視覚障害の専門でないにも関わらず相手のことを気遣った対応をされていて、隊員が行った先でその場のことをより吸収して、相手のニーズに合わせて対応していく力も必要だと感じた。 セーブ・ザ・チルドレンセンター：子ども達の保護だけでなく根本的なところから改善しなければ力は付けられない。
7月28日(日)	ナイロビ国立公園視察	霧のため視界も悪かったがキリンなど観察。湖で無邪気に遊ぶ子どもたちを見たがそのときは感染症のことなど、全く思いもしなかった。移動しながらの景色は、田舎の生活を早送りで見ているようだった。フェリーに乗ることができ、公共の交通機関の乗車体験ができた。

日 時	訪 問 先	所 感
7月29日(月)	長崎大学ピタ拠点訪問 ・教育局訪問 ・初等学校視察 ・中等学校視察 ・保健局訪問 ・診療所視察 ・民家視察	民家：家の中に入れてもらい、かまどや洗濯物を干してあるところなど、日本と違うところを見ることができた。家の中がどんな様子なのか気になっていたので、入れてもらえてありがたかった。また、学校での教材としても住む場所は一番身近で比較しやすく、違いもたくさん見つかったのでありがたかった。
7月30日(火)	セコ女子中等学校での青年海外協力隊荒巻隊員(理数科教師)の活動視察 土のう事業視察・初等学校訪問 (NPO 法人道普請人)	セコ女子中等学校：荒巻隊員の影響があらゆるところに見られた。現地でも大きな声でいきいきと指導様子を見て荒巻隊員が日本のことを生徒に話をしたり、文化を伝えているということが伝わってきた。一人の日本人の影響がとても大きく感じられた。 土のう：雇用を生むことを支援の一つということを知った。道を造っている所の環境は、あまり整っていなかったが、生活する上でまず何が一番必要か考えさせられた。
7月31日(水)	CEMASTEIA 訪問 (理数科教育強化計画プロジェクト) 一村一品活動グループ視察(一村一品サービス改善プロジェクト)	CEMASTEIA：教育センターで様々な教師の研修をしていた。研修制度の確立を行い、授業の質を上げていく取り組みをされていた。 一村一品：バックやかごを作る方法を学んでそれぞれ家で作成し、販売する活動を支援。バナナを加工し、製品を売る活動。話を聞く中で、誇りを持って製品を作り、販売していた。
8月1日(木)	モヨ・チルドレン・センター視察 NPO 法人アマニ・ヤ・アフリカ視察	モヨ・チルドレン・センター：日本の児童養護施設にも以前訪れたが、同じような温かさを感じた。見守られている安心感からか、子どもたちがとても親切で優しいのが印象的だった。指導者の人数が少ないが、部屋や子どもたちの様子、会の進め方などから指導が行き届いているようだった。私の学校や宿舍の指導とどこが違うのか学びたいと思った。 アマニ・ヤ・アフリカ：身体障害者を雇用し、製品を日本に輸出。

日 時	訪 問 先	所 感
8月2日（金）	<p>マーケット視察</p> <p>青年海外協力隊豊田隊員 （野球）の活動視察</p>	<p>マーケット：値段交渉をしながらもだんだん、情が沸いてきた。結局、店の商品ではなく売っている人を見て店を選び、交渉しやすいところで商品を買っていた。実際に欲しいものは別のものだった。と後から気付いた。</p> <p>豊田隊員の視察：野球活動。聾学校のグラウンドを利用。学校の事務職員、寮の職員の聴覚障害者に会い（3名）、手話で自己紹介をしてもらった。鹿児島 の聾学校職員で聴覚障害者の割合は約4%。ケニアの方が多いのかも知れないと思った。手話が同じ表現「日本」。指文字が同じ表現「エ」「ラ」「ア」「オ」など</p>

Ⅲ. 授業実践例報告書

子どもの笑顔は地球の未来

田中 朋子
TANAKA TOMOKO

南小倉小学校・南小倉中学校（福岡県）

担当教科：校長

- 実践教科：総合的な学習の時間・職員研修
- 時間数：3回（3時間）
- 対象学年：小・中学生・教職員

カリキュラム

■ねらい

- ・世界の子どもの姿や生活を知る中で自分の生活を振り返り、本当の幸せについて考える
- ・世界で活躍する日本人の姿を通して、自分にできることを考える。
- ・発展途上国の教育の現状を知るとともに自国の教育や子どもの姿について考える。

■実践内容

回	プログラム	備考
1	【わたしも立派な国際人 小学校5年生】 ・ケニアについて想像してみる。 ・地図（地球儀）や写真を見ながら、食事・建物・自然などケニアに触れる。 <グループ学習> ・日本と同じところや違うところを見つけ発表する。 <ペア学習> ・青年海外協力隊員の活躍などを知り、自分たちにできることを考え発表する。 <グループ・全体>	【参考資料】 ・国際協力機構（JICA）『国際理解教育実践資料集』 ・日本ユニセフ協会ホームページ
2	【わたしたちにできること 中学校1年生】 ・発展途上国の現状を知る。 <数字から見る世界> ・恵まれない教育の現状から、勉強の意味を考える。 ・世界で活躍する日本人の姿から自分にもできることを考える。 ・本当の幸せについて考える。 <感想文>	
3	【子どもの笑顔は地球の未来 教職員】 ・発展途上国の教育について知ることにより、日本の教育制度について考える。 ・貧困の循環を断ち切るためにどのようなことができるか考える。 ・国境を越え、世界で活躍・貢献する日本人の姿から世界貢献できる子どもの育成について考える。 ・子どもの笑顔がもたらす明るい未来を担う教育の重要性について共有する。 <講演会・意見交換>	

授業実践の詳細

1 時限目「わたしも立派な国際人」(小学5年生)

1 子どもの活動の流れ

- ① ケニアの国の様子について知る。
地球儀をもとにケニアの位置などを確認し、どんなところが想像してみる。
写真を見ながら、食事・建物・自然などケニアに触れる。
- ② 写真をもとにケニアと日本の同じ所と違う所を見つける。 <ペア学習>
- ③ 感想や意見を交換する。 <グループ・全体>

この時限のねらい

世界のできごとをどれだけ知っているだろうか。食糧難や病気に苦しむ子どもたち。国際人として自覚をもって世界に思いを馳せてみよう。世界の人々と心で結びつくことができるなら、今の私たちにもできることがみつかるはず。

2 子どもの活動の成果・反応

<児童の意見・感想から>

- ケニアには学校に行けない人がいることはとてもビックリしました。日本では当たり前のことがケニアでは当たり前ではなかった。もし、できることがあるならできるだけ取り組み世界を救いたいと心から思いました。
- 一日100円以下で生活していると聞きとても驚きました。ケニアには学校に行ける子どもが少なく、病気で亡くなる人が多いところが日本とはかなり違うなと思いました。でもサッカーが人気なところなど同じところもたくさんありました。僕も、ケニアの人みたいに笑顔で頑張ろうと思いました。
- ビックリしたことは蚊に刺されるだけで病気になることです。でも、そんなケニアに日本人が行って助けていることはとてもいいことだと思った。僕たちもケニアの人たちのために何か考えたいと思う。
- 僕は感動しました。もっとケニアのことを知りたくなりました。これをきっかけにもっと他の国のことも調べてみたいです。僕も、大きくなったら行ってみたいです。
- 子どもたちは楽しそうに遊んで笑顔があったのでよかったです。ケニアの知らない所を詳しく知れてよかったです。このことをお家の人にも話そうと思います。
- 私は、今までほかの国の事を考えたことがなかったので、とても勉強になりました。これからは自分にできることを考え、いろんな国に行って、できることをしてみたいです。

3 使用した教材

<教材1> 写真：日本と同じところや違うところを見つけてみよう

◎子どもたちから出た意見(一部抜粋)

おなじところ	ちがうところ
・サッカーが人気 香川が有名 ・子どもが元気 ・家族仲良く幸せに暮らしている ・勉強したり、遊んだりしている	・動物が身近にいる。 ・お札にライオンの透かしがある ・学校にいけない子どもがいる ・蚊に刺されると病気になる

<教材2>ケニアの民芸品



2 時限目「わたしたちにできること」（中学校1年生）

1 子どもの活動の流れ

- ① 数字でみるケニア国クイズに答える。〈グループ〉
子どもや国の様子を数字で表したクイズ形式で出題
グループで何の数なのかを考える
- ② ケニアの国の様子を知る。
写真を見ながら、食事・建物・自然などケニアに
触れる
- ③ ケニアで貢献している日本人の活躍を知る。
写真を見ながら青年海外協力隊員などの紹介をす
る
- ④ 私たちにできることを考える。〈個人・グループ〉
- ⑤ 意見や感想を発表する。

この時限のねらい

国境を越え世界の国々で世界の人々に貢献する日本人がいる。青年海外協力隊は世界各地でいろいろな技術を伝授している。NPO や NGO のボランティア活動も盛んである。世界の中の日本、私たちにできることを考えてみよう。

2 子どもの活動の成果・反応

〈生徒の反応や様子から〉

- 外国の子どもたちに薬や学校をプレゼントしようと自分たちで募金活動に取り組んだ仲間がいたり、災害で困っている外国の人たちに役に立つことをみんなで行動をおこした仲間もいる。ケニアの現状を知ることにより、あらためて自分の国の環境や自分の暮らしを見直すことができた。
- 自分の国の幸せだけや、利益のみを追及してばかりではだめだということ。地球規模の相互依存・協力関係の中で自国の文化や伝統に誇りをもちつつほかの国の文化を知りたいという好奇心に触れることができた。
- 世界に目を向けることにより、日本の良さを感じ、愛することにつながる。また、日本を愛することが世界を愛することにつながっていく。地球規模で私たちにできることを考えてみる機会になった。

3 使用した教材

〈教材1〉クイズ：何の数でしょうか？

何の数でしょうか？

日本 2 ケニア 48

乳児の亡くなる ※1000人

何の数でしょうか？

日本 100 ケニア 29

中学校に入学する 子どもの割合(%)

〈教材2〉ユニセフ資料

私たちにできること

○ 100円がたくさん集まると

- ・ 790円
マラリアの原因となる蚊から身を守るための殺虫剤
処理をした蚊帳 3張
- ・ 1012円
緊急時に栄養が足りない日
リービスケット 20箱
- ・ 1328円
熱に弱いワクチンを運ぶの

私たちにできること

○ 100円でできること

- ・ 104錠
1錠で4～5リットルの水をきれいにするこ
ができる薬
- ・ 16袋
下痢で体から水分がなくなって命を失うことをふせ
ぐ粉 (経口補水塩)
- ・ 8回分
ポリオから子どもを守るためのワクチン

3 時限目「子どもの笑顔は地球の未来」 (教職員)

1 職員の活動の流れ

- ① ケニアの国の子どもの様子について
貧困による負の連鎖について考える
- ② ケニアの教育の現状について
世界の中で誇れる日本の教育
- ③ ケニアで活躍している日本人について
国際社会で生き、自分たちが良ければいいという
時代ではない
- ④ 意見交換 <全体>

この時限のねらい

ケニアの教育の現状から日本の教育制度を考える。国境を越え世界の国々で活躍・貢献する日本人の姿からグローバルに生きる力子どもを育てていきたい。子どもの笑顔が地球の未来につながる。教育を考えてみよう。

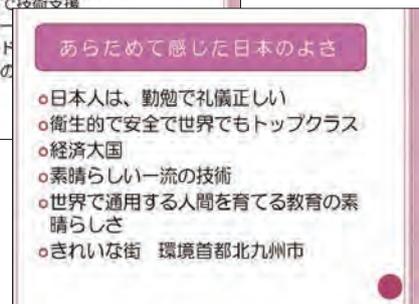
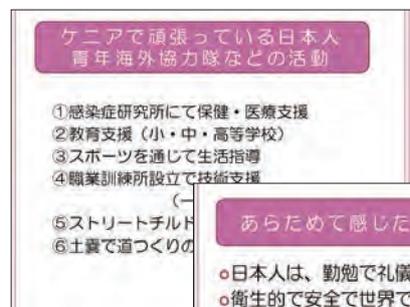
2 教職員の活動の成果・反応

<意見・感想より>

- 恵まれない環境の中で学ぶ子どもの姿は、心が痛む。負の連鎖を断ち切るためには教育だと思った。
- 学ぶ環境が十分ではないのに学校が楽しい、勉強が好き、将来は医者になりたいと言うあの笑顔はいったいどこから来るのだろうか。学ぶ意欲は日本より高いように感じた。
- 日本には、学習指導要領があり全国各地どこで学んでもきちんとした学びの確保がなされている。素晴らしい環境なんだと改めて思う。
- 学校の設備や暮らしを考えたとき、日本人の当たり前が通用しない。恵まれた環境の中で、学ぶ意欲を高めていくことの重要性をあらためて感じさせられた。
- 青年海外協力隊に入るきっかけが、先生の外国の話や国際貢献の話からだったことを聞くと、子どもに伝えることの意味や大切さ責任・ひろがりなど心を育てる大きな役割をもっていることを真摯に受け止めた。
- 自分自身が広い視野をもち、世界に目を向けていき、国際貢献できる子どもを育てていきたい。

3 使用した教材

<教材1>プレゼン (写真)



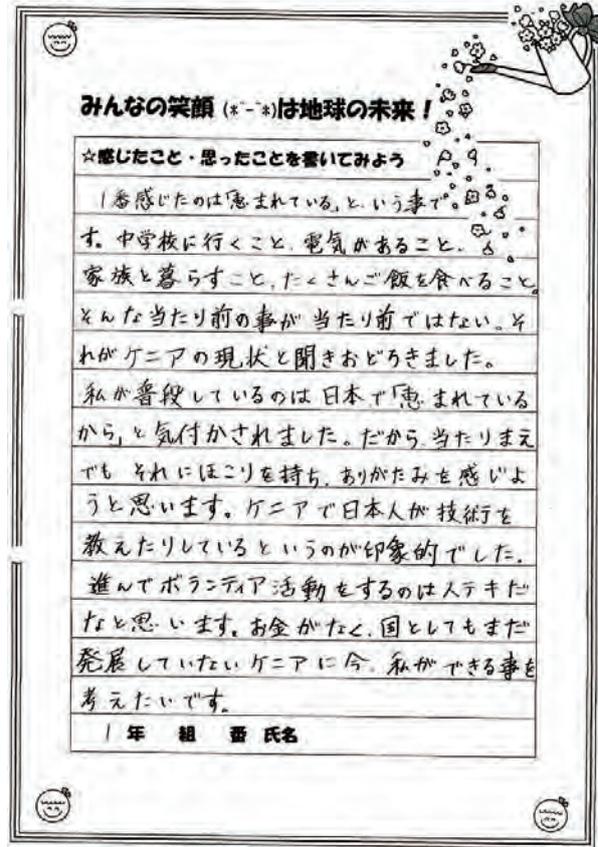
■全体を通して

① 授業の様子



<写真1>

ケニアの紙幣を手に、ライオンの透かしなどを見つけ喜ぶ小学5年生



<中学1年生の感想文>

② 参考文献・資料

- 1) 文部科学省 『こころのノート5・6年生』『こころのノート中学生』
- 2) 独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 地球ひろば 『国際理解教育実践資料集』
- 3) 公益財団法人 日本ユニセフ協会 ホームページ

成果と課題

■成 果

発展途上国の現状に目を向け、世界を知りたいという思いや自分たちの生活や日本をあらためて見直す機会となった。また、世界で活躍する日本人の姿から、自分たちにできることや世界貢献へ向けての意欲や、日々の暮らしへの感謝の気持ちが醸成した。

■課 題

学習や講演会を通じて、学ぶ意味や意欲、自分たちにできることがあると感じた思いをより現実のものとしてできるように今後も継続的な働きかけが不可欠である。

■備 考

発展途上国の教育の現状を知ることにより、日本の教育制度や恵まれた生活環境をあらためて感じる機会となった。地球規模の協力関係の中で貢献できる人を育てていきたい。

違う？ 同じ？ 比べてみよう日本と世界を

田 渕 歩

TABUCHI AYUMI

金川中学校（福岡県）

担当教科：英語科

●実践教科：総合的な学習の時間

●時 間 数：4時間

●対象学年：中学校3年生

カリキュラム

■ね ら い

- ・自分の幸せとは何か考えるきっかけを与える。
- ・学校に行けない子どもたちの現状を知り、自分たち

■実践内容

回	プログラム	備 考
1	【アフリカ・ケニアに目を向ける】 ・ケニアで撮った写真をスライドで見せ、気づきを共有する。	
2	【幸せとは何か考える】 ・ケニアの学校や子どもたちの写真から読み取れることを出しあう。＜KJ法＞ ・ケニアの子どもと自分たちの幸せをそれぞれ考え、違いや共通点がないか考える。	
3	【学校に行けない子どもたち】 ・「学校に行けない世界の子どもたち」を読んで、子どもたちが学校に行けない理由とそれによって生じる問題を考える。 ・子どもが学校に行けないことで生じる「負の連鎖」がどのように繋がっていくかと、それをどのようにしたら断ち切れるかということを考える。	【参考資料】 「学校に行けない世界の子どもたち」 JICA
4	【世界食べ方いろいろ】 ・箸、ナイフとフォーク、手で食べることの「良い点」、「悪い点」を挙げる。 ・手でカレーライスを食べしてみる。 ・「あってもいい違い」と「あってはいけない違い」について考える。	

授業実践の詳細

1 時限目「タイトル ケニアについて知ろう」

① 子どもの活動の流れ

- ① 教師が用意したスライドを使ってケニアの写真を見せ、何か気づいた事を発表する。

この時限のねらい

アフリカ・ケニアの写真を見ることを通して、ケニアについて知る。

② 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「ケニアやアフリカについて知らないことばかりだった」、「ケニアの飴はおいしいものとおしくないものがあった」などの感想が出ていた。
- ◇ 特にケニアの子どもたちが手でご飯を食べている様子を動画で見せたときに一番反応があった。手で食べるということに抵抗感を感じる子どもが多いことに驚いた。

③ 使用した教材

<教材1> ケニアで撮影した写真



2 時限目「タイトル What is happiness ?」

1 子どもの活動の流れ

- ① 前時で学習したケニアの基礎知識について振り返る。
- ② グループに分かれて渡された写真について読み取れる情報を整理する。
- ③ 読み取った情報を全体で確認し、②で提示した写真に関わるもう一枚の写真を提示する。
- ④ ケニアの子どもの幸せと自分たちが考える幸せをそれぞれ考える。

この時限のねらい

日本とケニアの子どもたちを比較することを通して、様々な幸せの形があることを知る。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 「ケニアの子どもたちはみんな笑っていて中が良さそうだった。そんな姿を見てケニアの印象が変わった。ケニアの人みたいに自分たちも笑顔になりたいと思った。」「ケニアには日本にはない幸せの形があると思います。」「ケニアと日は環境が違って学校に行けて嬉しいことは私たちと変わらないんだなと思いました。」「世界には日本よりも貧しい国がたくさんあるので、今の生活が当たり前だと思っはいけないと思います。そして世界の貧しい国のためにやれることをすべきだと思います。」など、ケニアと日本を比べ同じところ、違うところに気付くことができていた。またそこから自分たちの生活を振り返り幸せとは何かについて考えることができていた。そのためねらいを一定の水準で達成することができた。

3 使用した教材

<教材1> ケニアで撮影した写真（6枚）



<学校のトイレ>



<ボロボロの教室>



<裸足の生徒が多い学校>



<トイレの前でモデルごっこ>



<ボロボロの教室で笑顔の子どもたち>



<裸足でも元気！>

3 時限目「タイトル 学校に行けない子どもたち」

1 子どもの活動の流れ

- ① ヒンドゥー語で書かれた3つの瓶の絵を見せ、どれが本物の薬かを予想させ、識字教育の重要性を理解する。
- ② 「学校に行けない世界の子どもたち」を読んで、子どもたちが学校に行けない理由と、それによって生じる問題は何か考える。
- ③ 学校に行けないことで生じる「負の連鎖」がどのようにつながっていくかを考える。(個人、グループ)
- ④ 「負の連鎖」を断ち切るためにはどのようにしたら良いか考える。

この時限のねらい

学校に行けない子どもたちが世界にたくさんいるということを理解し、今の自分たちには何ができるかを考えることができる。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ JICA から提供していただいた教材、「学校に行けない世界の子どもたち」は、生徒にとって大変読みやすく、理解しやすかったようだ。中学3年生にとっては幼稚すぎると思ったのだがそのようなことは全くなかった。
- ◇ 発展途上国の割合が約8割で、日本のような国は世界の中で2割程度しかないという事実を初めて知った生徒がほとんどであった。
- ◇ 生徒の感想：「私たちは、学校ってだるいと簡単に口にしてはいるけど、学校に行けない子どもたちは「勉強したい」と思っているのに、私たちが口にしてはいるだるいという言葉は、学校に行けない子どもたちが言っている言葉を壊しているような気持ちになりました。」「今の自分には勉強を頑張ることやフェアトレードの商品を買うことしかできないけど、大人になれば青年海外協力隊などに参加して教育を受けられない子どもの役に立つことが広がると思う。だから海外にも目を向けた考え方ができるようになりたいと思った。」



<教材本を真剣に読んでいる>



<負の連鎖をグループで話し合う>

3 使用した教材

- <教材1> 「学校に行けない世界の子どもたち」 JICA
- <教材2> ケニア、カンボジアで撮った子どもたちの写真
- <教材3> ヒンドゥー語で書かれた瓶の絵3枚

4 時限目「タイトル 世界食べ方いろいろ」

① 子どもの活動の流れ

- ① 自分たちの普段の食事マナーについて考える。
- ② 世界の食事の様子を写真から読み取り、それぞれの良いところと悪いところをグループでまとめる。
- ③ 手で実際にカレーライスを食べしてみる。
- ④ JICA 西宮さんからガーナでの食文化の話聞く。
- ⑤ 自分たちの生活の中で「あってもいい違い」と「あってはならない違い」をそれぞれ考える。

この時限のねらい

世界の食事の食べ方を理解することを通して、「あってもいい違い」と「あってはならない違い」について考えることができる。

② 子どもの活動の成果・反応

- ◇ カレーを手で食べることにに対して抵抗を感じている子があまりに多かったので驚いた。最後まで手で食べられなかった生徒も中にはいた。
- ◇ ゲストティーチャーの西宮さんの話を聞いて、文化の違いに興味を持ち、これから他の国の文化について知りたいと感想に書いている子もいた。
- ◇ 生徒からの感想として「他の国には自分たちとは違う食べ方をする人がいると知って驚いた。他の国の文化をもっと知りたいと思った。」「最初は手で食べることにに対して抵抗感があり、食べたくなかった。今でも抵抗を感じます。しかし西宮さんの話を聞いて、みんなで一緒に食べると楽しそうだとおもいました。」と話を聞いた前と後では感じ方に変化があった生徒が多く見られた。



手をボールで洗ってみる。



手を使ってカレーを食べよう！

③ 使用した教材

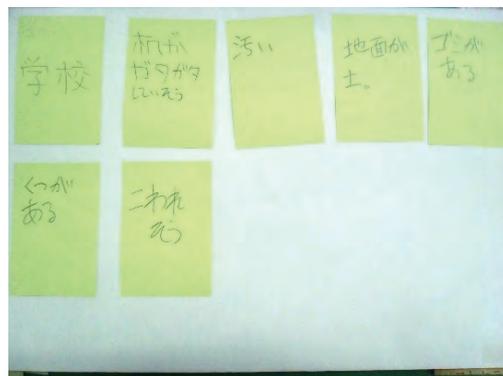
- <教材1> 箸、フォーク/ナイフ、手を使って食べている様子の写真
- <教材2> タイ米のご飯、インドのカレー
- <教材3> アフリカガーナやケニアでの食に関する写真

■全体を通して

① 授業の様子



<写真から読み取れる情報を書きだそう>



<生徒が書き出した気づき>



<写真1> JICA 西宮さんがどうやってカレーを手で食べるか教えてくれた。



<写真2> 手で食べることの良い点と悪い点を班で話し合って発表した。



<写真3> 手でカレーを食べた後に手をボールを使って洗おう。

② 参考文献・資料

- 1) 独立行政法人国際協力機構(JICA) 『国際理解教育実践資料集 -世界を知ろう! 考えよう!』
- 2) 独立行政法人国際協力機構(JICA) 『学校に行けない世界の子どもたち』

成果と課題

■ 成 果

生徒の日常からかけ離れているアフリカについて知ることにより、国際理解を深め、自分たちの日常生活を振り返ることができた。

■ 課 題

実践の1回目から4回目までの関連性をもっと濃いものにしていくべきだと思った。単発で終わってしまった感があった。

■ 備 考

国際理解教育は、年間を通じて取り組んでいくことで子どもたちにも浸透していくと思う。来年度からは年間計画を作り、計画的に進めていく必要がある。

海外研修の成果を日々の授業に盛り込む

福岡 弘道
FUKUOKA HIROMICHI

福岡市立柏原中学校（福岡県）

担当教科：社会科

●実践教科： 地理的分野
世界の諸地域「アフリカ州」

●時間数：6時間

●対象学年：中学1年生

カリキュラム

■ねらい

- ・アフリカ州の地域的特色について関心を高め、意欲的に追究することができる。【関心・意欲・態度】
- ・アフリカ州の地域的特色と、アフリカ州を豊かにする方法を多面的・多角的に考察し、表現することができる。【思考・判断・表現】
- ・地図や統計、写真などを適切に読み取り、表や白地図にまとめることができる。【技能】
- ・アフリカ州の気候や地形、文化などの特色を理解し、その知識を身につけている。【知識・理解】

■実践内容

回	プログラム	備考
1	【大観「アフリカ州の自然」】 ・アフリカ州の地形、気候の特色を調べ、ワークシートに記入。 ・日本とアフリカ州の主要な国々の情報を表にまとめる。	・教科書 『中学生の地理』帝国書院 平成24年度版
2	【大観「アフリカ州の歴史と文化」】 ・アフリカ州の歴史と文化（言語、宗教）を白地図にまとめることで、植民地支配の影響を確認する。	・地図帳 『中学校社会科地図』帝国書院 平成24年度版
3	【追究「モノカルチャー経済下の生活」】 ・アフリカ州は本当に貧しいのか、「GNI」と「資源・輸出可能な特産物の有無」について調べることで確認し、資源や特産物があるにもかかわらずGNIが低い理由について、「モノカルチャー」に着目して追及する。	・『中学校学習指導要領解説 社会編』2008
4	【貿易ゲーム】 ・「貿易ゲーム」を通して、国家間の立場の違いや、工業生産、国際援助の仕組みなどを体験的に理解。	

回	プログラム	備考
5	【アフリカ州が豊かになるために、何が必要か】 ・「ガーナの少年マイケル君」の現在と未来の姿を比較し、豊かになったいきさつについて話し合うことで、アフリカ州を豊かにする方法について深く考えさせる	
6	【アフリカ州が豊かになるために、自分ができること】 ・「アフリカ州が豊かになるために、自分には何ができるか。」をテーマに作文。	

授業実践の詳細

1 2 時限目 大観「アフリカ州の自然」「アフリカ州の歴史と文化」

① 子どもの活動の流れ

【1時間目】

- ① 教師がケニアで撮影した野生動物の動画を見る。
- ② アフリカ州の代表的な国名、地形、気候の特色を調べ、ワークシートに記入する。国名（南アフリカ、ケニアなど）、地形（サハラ砂漠、ナイル川など）、気候（赤道をはさんだ気候の違い）
- ③ 日本とアフリカ州の主要な国々の情報（人口、面積、一人当たりの国民総所得(GNI)など)を表にまとめる。

この時限のねらい

アフリカ州の地域的特色（国名、地形、気候、その他主要な国々の情報）や **歴史と文化（言語、宗教）** を大観することで、基礎的・基本的な知識を身につけ、**様々な植民地支配の影響を発見する。**

【2時間目】

- ④ 動画「ケニアの高校での数学の授業」を見て、なぜ英語で授業が行われているのかを考える。
- ⑤ アフリカ州の言語と宗教の分布を調べ、白地図にまとめる。
- ⑥ ヨーロッパ的な言語と宗教が分布している理由について説明した一文を教科書から探し出す。
- ⑦ アフリカ的な生活を写真と動画で見る。（食文化、スポーツ、音楽、ケニアの同世代の子どもたちの生活）

② 子どもの活動の成果・反応

【1時間目】

- ◇ 教師自身が撮影したものであることが、動画に一層のリアリティを与え、これから学ぶアフリカ州への生徒の関心を大きく高めた。
- ◇ 6人の生活班単位ですばやく調べ学習を行った。調べる箇所の役割分担をしたり、生徒同士で教え合う姿が見られたり、今後のグループ学習の基盤が班内で整った。

【2時間目】

- ◇ 聞いたこともないアフリカの言語ではなく、英語で授業が行われていることに驚き、「ヨーロッパ諸国による植民地支配」について深く考えることができた。
- ◇ ケニア人と日本人の風習の共通点と相違点について考えることができた。

③ 使用した教材

【1時間目】

<教材1> 動画「ナイロビ国立公園のキリン」「ナイロビ市街地のアフリカハゲコウ」

<教材2> ワークシート①、教科書、地図帳

【2時間目】

<教材3> 動画「ケニアの高校での数学授業」（セコ女子中等学校でのケニア人教員による授業風景）

<教材4> ワークシート②、教科書、地図帳

3 時限目 追究「モノカルチャー経済下の生活」

① 子どもの活動の流れ

- ① 事前アンケートに生徒が書いた、アフリカ州のイメージ（「野生動物」「大自然」「貧しい」「危険」「内戦」「黒人が多い」など）を確認。ネガティブなイメージを持つ生徒が多いことを知った。
- ② 「ナイロビ都市部の写真」を用いてフォトランゲージ。学習課題を「アフリカ州は本当に貧しいのだろうか。」と設定。
- ③ 地図帳の統計資料で、一人当たりの国民総所得（2009）が低い5カ国（ブルンジ、リベリア、コンゴ、マラウイ、アフガニスタン）を探し、ワークシートに記入した。
- ④ 貧しさの原因について「農産物や資源が無いから」なのか追究した。主要な農産物（コーヒー豆、カカオ）の分布と、主要な鉱産資源（石油、金、ダイヤモンド、レアメタル）の分布を白地図にまとめることで、アフリカ州には豊富な特産物が存在することを発見した。
- ⑤ 「農産物や資源があるのに、なぜ貧しいのか」追究する。

この時限のねらい

アフリカ州は本当に貧しいのか、「GNI」と「資源・輸出可能な特産物の有無」について調べ、資源や特産物があるにもかかわらずGNIが低い理由について、「モノカルチャー経済」に着目して追究する。

② 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 近代的なビルが林立するナイロビ市街地の写真と、国民総所得ワースト5カ国のうち、実に4カ国がアフリカ州にある事実とのギャップによって、生徒の思考は大きく揺さぶられた。
- ◇ グラフ「一次産品の価格推移」と、グラフ「一次産品生産者の取り分」を「モノカルチャー経済」に着目して読み取ることで、アフリカ州の貧しさと、前時で学んだ「植民地支配」を関連付けることができた。

<教材5>

③ 使用した教材

<教材5> 写真

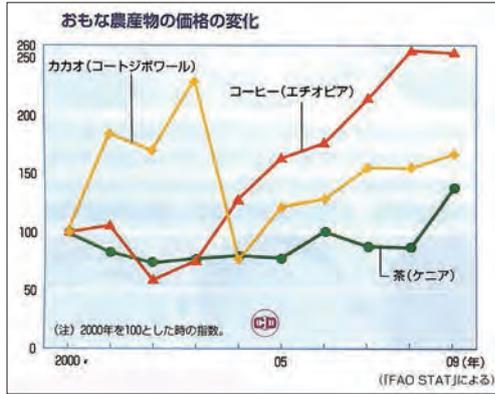
「JICA オフィスからのナイロビ市街地の展望」

<教材6> ワークシート③、教科書、地図帳

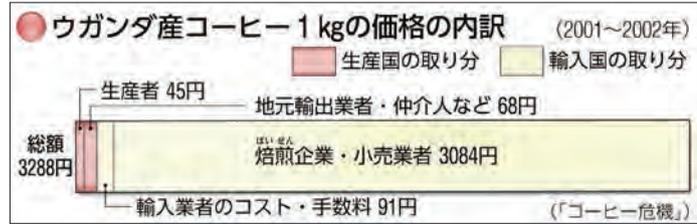


- <教材7> グラフ「一次産品の価格推移」
『アクティブ地理』2013 浜島書店より、一部改。
- <教材8> グラフ「一次産品生産者の取り分」
『アクティブ地理』2013 浜島書店より、一部改。

<教材7>



<教材8>



4 時限目「貿易ゲーム」

「貿易ゲーム」の概要

貿易ゲームは、国際理解教育・開発教育などで盛んに用いられている手法の一つで、製品を作り輸出する活動を通して、潤沢な生産設備や資金を持つ先進工業国と、生産設備や資金が不足する後発開発途上国との間の格差を体験する。

次時でアフリカ州の地域的特色、「植民地支配」と「モノカルチャー」の二つが、いかに現代アフリカ社会に影響を及ぼしているかを追求するために、「貿易」や、先進国と途上国の間の「格差」について体験的に知っておくことが非常に重要であった。

「貿易ゲーム」のルール

貿易ゲームは、様々な道具（ここでははさみやコンパスなど。「生産設備」を表す）を用いて材料（ここでは新聞紙。「資源」を表す）を決められた規格の製品に加工し、マーケットに販売した売り上げを競うゲームである。割り振られる封筒の中身（道具、材料、資金）は、チームの立場（ここでは先進工業国、開発途上国、後発開発途上国の違い）によってそれぞれ異なり、先進工業国は道具と資金が豊富で材料が乏しく、後発開発途上国は道具と資金が乏しく材料が豊富である。封筒の中身以外の私物（自分の筆記用具など）は一切用いてはならないが、交渉などによって他のチームの道具を使ったり借りたりすることは許される。そして最終的な所持金を計算し、最も多かったチームの勝利となる。今回は生活班の6人を1チームとし、それぞれ国名を教師が生徒の性格などを考慮して割り振った。封筒の内容は以下の通りである。

- 先進工業国「イギリス」「フランス」（はさみ2本、コンパス1つ、直定規2本、鉛筆3本、半円の型紙一枚、新聞紙1枚、5000ドル※クリップ大5個）

この時限のねらい

「貿易ゲーム」を通して、国家間の立場の違いや、工業生産、国際援助の仕組みなどを体験的に理解する。

- b. 開発途上国「マレーシア」「タイ」（はさみ1本、直定規1本、鉛筆1本、新聞紙3枚、2000ドル※クリップ大2個）
- c. 後発開発途上国「ケニア」「ガーナ」（長さ3cmに切断した鉛筆一本、新聞紙10枚、200ドル※クリップ小2個）

1 子どもの活動の流れ

- ① 貿易ゲームを行う。
- ② ゲームの振り返りを行う。班ごとに感想をA3の紙に記入し、黒板に掲示して、班の代表者が発表。
- ③ 教師によるゲームのまとめを聞く。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ゲームそのものを楽しみながら国家間の格差や、理不尽な差別について感じ取ることができた。
- ◇ フランスチームに次いでケニアチームが2位となり称賛を浴びたが、大躍進の陰に、イギリスチームから無償提供されたコンパスを用いて、高額な製品を量産できた事実が感想から明らかになった。先進国による「開発援助」の影響力の大きさを意識づけることができた。

3 使用した教材

- <教材9> スライド「貿易ゲームをしよう」（貿易ゲームのルールなどを、電子黒板ですばやく解説。）
- <教材10> 6種類の封筒、及び道具類。

5 時限目「アフリカ州が豊かになるために、何が必要か」

1 子どもの活動の流れ

- ① 前時の振り返り、マイケル君の生活を改善するためには
 - ・・・前時までの内容を振り返った後、文章「マイケル君の生活」を音読。どうすれば生活が豊かになるかを2分間で考え、発表。

- ② T2の反論1（思考の揺さぶり）、30年後のマイケル君からの手紙

・・・発表した「豊かになる方法」に対してT2から「確かに実現すればマイケル君の生活はよくなるだろうが、果たして本当に実現可能なのか？ できるのならもう既に行われているのではないか？」と反論を受け、思考を揺さぶられた。

T2の反論に対してT1が提示した「30年後のマイケル君からの手紙」を読み、30年間で生活が豊かになった理由（ガーナが国を挙げて取り組んだと思われる分野）を考えた。生徒の意見はT1がキーワード化（「工業」化、「教育」の充実、「政治」改革）し板書。

- ③ T2の反論2（貿易ゲームの振り返り）、後発開発途上国の課題と強みをキーワード化し追加

この時限のねらい

「ガーナの少年マイケル君」の現在と未来の姿を比較し、豊かになったいきさつについて話し合うことで、アフリカ州を豊かにする方法について深く考えさせる

・・・T2から前時の貿易ゲームで生徒が書いた感想をもとに、『確かに「工業」「教育」「政治」に力を入れたいが、入れたくても入れられない。その理由を貿易ゲームで見つけたのではないか?』と反論を受け、再び思考を揺さぶられた。生徒はT2が付け加えた「モノカルチャー経済」「お金がない」というマイナスのキーワードと、反対にT1が付け加えた「援助」「資源」というプラスのキーワードをワークシートに記入。

④ ストーリー作り、発表

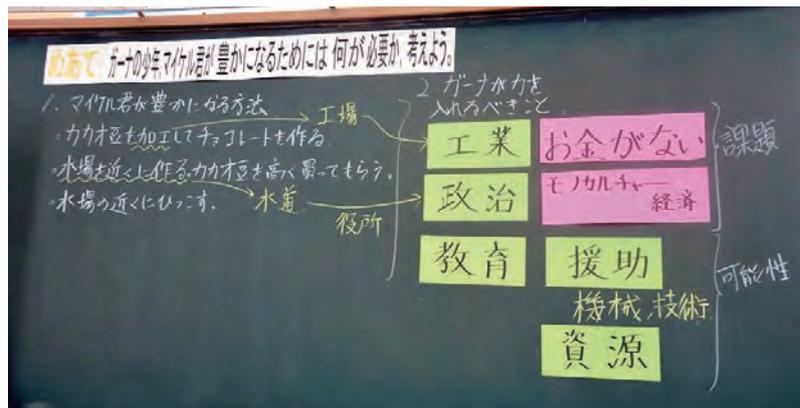
・・・7つのキーワード {「工業」「教育」「政治」(豊かになるために力を入れるべき分野)、「モノカルチャー経済」「お金がない」(克服すべき課題)、「援助」「資源」(課題克服の可能性)} を使って、ガーナが課題を克服して30年間で豊かになったストーリーを班ごとに作った。作ったストーリーはホワイトボードに記入し、黒板に掲示。代表者が発表した。

⑤ まとめ

・・・T1から電子黒板を用いて「フェアトレード」の解説を受けた。

T2から、各班のストーリーへの感想とともに、ガーナの発展やマイケル君の生活向上のために「自分には何ができるだろうか。」という視点を提示され、アフリカ州の教育の充実のために、実際に活躍している日本人の例として、動画「荒巻隊員による理数科授業の様子」を観た。

<授業の板書>



② 子どもの活動の成果・反応

◇ 生活を豊かにする方法について、「カカオ豆を加工してチョコレートを作る。」「水場を近くに作る。」「水場の近くに引っ越す。」「カカオ豆を高く買ってもらう。」などの意見が挙がった。

◇ 各班のストーリー（原文）

- a. 「資源を売りさばき、もうかったお金で工業を発展させ、新しいものを作って、モノカルチャー経済をなくした。政治に協力してもらって水道を作った。」
- b. チョコレートを作るための工場を援助してもらった。→工業が発達し、機械も作る。→政治が教育に力を入れた。→モノカルチャー経済から抜け出した。
- c. 資源を売って部品を買い、自分の国で機械類を作り、それを売る。そしてモノカルチャー経済から脱出する。
- d. 他の国から援助をもらって工業が発展した。政治改革に力を入れた。資源を有効に使いお金を増やし、そのお金を教育などに使った。
- e. 適正な価格で取引してもらい、いろんな国から援助してもらい工業化し、モノカルチャー経済をのりきる。そして自分の国の資源を原料にする。

f. マイケル君はカカオ豆だけではお金が少ないと分かり、カカオ豆以外の資源を作ろうとしました。そこでマイケル君は金を掘ればいいと思いました。それを陰から見ている政治家は他国に援助を頼みました。

◇ どのストーリーも現実の国際社会を鋭く言い表していて、示唆に富んでいる。「a.」には、貿易ゲームの戦略が直接生かされているし、「b.」は、開発援助から始まる持続的な経済発展のプロセスそのものである。「e.」には、この時点ではまだ学習していないのに「フェアトレード」の概念が既に登場している。「f.」もある意味、サハラ以南のアフリカ諸国で進行中の出来事である。

③ 使用した教材

<教材 11> ワークシート④

※以下はワークシートから抜粋した、架空の少年「マイケル君の生活」。生徒が感情移入しやすいように、年齢設定は13歳とした。

朝起きて、家の手伝いをした後、小学校に行きます。小学校には、同じようにカカオ豆農家で働いている少年たちがたくさんいます。彼らは「勉強は成功への鍵だ!!」と信じているので、とても勉強家です。学校から帰ると、マイケル君は家の手伝いで、2キロ離れた水場へ水汲みに行きます。とても遠いのですが、何回も往復します。学校がない日、マイケル君は家族と一緒にカカオ豆の畑で働きます。給料は1日1ドル（約100円）。とても安いのですが、家族にとっては大切な収入です。学校が大好きなマイケル君ですが、カカオ豆栽培が忙しくなる時期には、時々学校に行けなくなることもあります。

<教材 12> 「30年後のマイケル君からの手紙」

やあ弘道君。元気かい？

僕も今年で43歳になったよ。今もガーナ国内で働いています。

勉強を頑張ったおかげで、あこがれの仕事につけたんだ。ひと月の収入はだいたい2千ドル（約20万円）贅沢をしなければ、家族みんなで十分生活していける金額だよ。

最近家を買ったんだけど、蛇口をひねれば水が出るし、とっても快適なんだ。

マイケルより

<教材 13> 電子黒板用スライド「貿易ゲームの振り返り」

<教材 14> 電子黒板用スライド「フェアトレードとは」

※左がフェアトレード導入前、右が導入後の内訳。画面をクリックするとフェアトレード相当分が赤く塗りつぶされる。



<教材 15> 動画「荒巻隊員による理数科授業の様子」

6 時限目「アフリカ州が豊かになるために、自分には何ができるか。」

① 子どもの活動の流れ

- ① 青年海外協力隊や NGO などの活動を、動画と写真で知る。
- ② 作文をする。

この時限のねらい

アフリカ州が豊かになるために、自分には何ができるのか考え、文章にまとめる。

② 子どもの活動の成果・反応

◇ 生徒の作文（原文）を紹介する。

- a. 食の衛生をよくするために、植物の種、魚の稚魚を道具とともに送り、内陸国は植物を、海がある国は魚を育ててもらい、国が栄えるようにする。ついでに作り方も教えて、継続できるようにする。
- b. 私が今できることは募金をすることだと思います。私はアフリカの人々に、スポーツ用品を送ったり、きれいな水が飲める薬を送ったり、楽器（音楽が発達しているから）など、生活の支えになるものを送りたいです。でも一人の力では不可能なので、みんなで力を合わせて募金をすることが、私が今できることです。また、自分が使わなくなったものを送って、生活が少しでも豊かになってくれるとうれしいです。将来、自分自身が援助に行けるように、今のうちからお金を貯めるのも、私が今できることだと思います。
- c. アフリカを豊かにするために、私はアフリカのことを知ればいいと思います。どんな暮らしをしているのか、何を食べているのか、電機は、家は、洋服はどんなもの。まずはそこからだと思います。

単元全体を通して、生徒の思考は確実に深まったと感じる。「a.」の生徒は図らずも、青年海外協力隊の根本理念が、資金面設備面の援助だけではなく、技術面の支援によって持続可能な発展を実現することにあると看破している。「b.」の生徒は、「自分自身が援助に行けるように」貯金したいという一文が大変興味深い。「c.」の生徒は、アフリカ州を豊かにし、よりよい関係を作っていくためには、まず相手に関心を持つことが重要だと訴えている。

③ 使用した教材

<教材 16> 動画「ノックを打つ豊田隊員」、写真「長崎大学ビタ拠点と、風間さんの活動」

成果と課題

■ 成 果

- ・ 中学校社会科の教育課程の中に、教師海外派遣研修の成果を組み込むことができた。
- ・ ユニークな教材と、ICT、ティームティーチングの活用により、生徒の思考を揺さぶり、深めることができた。

■ 課 題

- ・ 評価方法の工夫、改善。

■備 考

- ・ 本年度、福岡市中学校社会科教科一斉研修会の地理部会において研究授業を行った。本実践の第5時が研究授業の「本時」にあたる。
- ・ 単元全体を通して、チームティーチング（T1、T2）による指導を行った。

風に立つライオン

(『中学生の道徳3』あかつき)

岸 森 布美子
KISHIMORI FUMIKO

熊本市立二岡中学校 (熊本県)

担当教科：英語科

●実践教科：道徳

●時間数：1時間

●対象学年：3年生 (38名)

カリキュラム

■内容項目

真理を愛し、真実を求め理想の実現を目指して自己の人生を切り開いていく。

■主 題

志高く生きる

【ねらい】

絶えず高い理想を求め、志を持って明るく生きることで、自己の人生を豊かにしようとする道徳的实践意欲を培う。

■キーワード

- ・ ケニア
- ・ 夢
- ・ ボランティア
- ・ 青年海外協力隊

■単元について (教材観、単元設定の理由、開発教育／国際理解教育の視点など)

本資料は、理想の自己を求めて生きる一人の青年医師が、かつての恋人にあてた返信の手紙である。彼は、自分に誠実な生き方を貫き、ケニアへ行く。迷いや悩みがなかったわけではなく、しかしそれを乗り越えて自己に忠実に選んだ道は間違いではなかった、と実感している姿を捉えることで、理想の自己を求めて生きることの大切さを学ぶことができる資料である。

中学3年生の生徒たちは、自らの進路や将来について考える機会が多くなる。人は誰もが、「より良く生きたい」と願ってはいるものの、しかし現実的には、自分自身を見つめることは容易ではなく、特に義務教育終了を目前に控えた生徒の中には、自分が何をしたいのかが分からず、将来への不安を感じている者も多く見られる。本資料の主人公の生き方を通して、積極的に自分の人生を切り開いていこうとする意欲を育てたい。

題材の舞台は、ケニアであり、ほとんどの生徒にとっては遠く離れた国という印象で、国名は聞いたことがあっても、当然行ったことなどなく、風景を思い描くことも容易ではないと考えた。また、開発途上国であるケニアで単身医療活動をする、という選択をした青年医師の心情にでき

るだけ共感させたいとも考えた。そこで、私自身が教師海外研修に参加した時に撮影した実際のケニアの風景や人々、さらに、ケニアで様々な活動を行っている実在する日本人を紹介することで、本題材の内容をよりとらえやすくなり、生徒たちが自分自身の生き方を考える、小さなきっかけになってくれるのではないかと期待している。

■ 展 開

	学習活動	発問と予想される生徒の反応	留意点
導 入	1. 自分の夢を思い描く。	【導入発問】 将来実現したいと思っていること、夢はなんですか。	・本時への意識付けとして、自由に答えさせる。
展 開	2. 資料の紹介を聞く。 3. 資料を読む 4. 自分の考えを記述し、発表する。	【教師による説明】 「これは、日本に残してきたかつての恋人から、結婚を知らせる手紙を受け取った主人公が、その彼女にあてて書いた返信の手紙です。」 ・教師による範読 【発問1】 あなたは医者のお卵です。恋人もいます。そんなあなたのところへアフリカの子供たちを助けるための医療活動の誘いが来ました。条件は単身で三年以上の勤務です。あなたはどうしますか。その理由は？ ○「行く」 ・後悔したくないから。 ・人の役に立ちたいから。 ・夢をかなえたいから。 ○「行かない」 ・恋人と別れるのは寂しいから。 ・知らない土地に行くのは不安だから。 ・日本でできることを精一杯すればいいから。 【発問2】 あなたはその恋人です。大好きな人がケニアに行くべきかどうか悩んでいます。あなたなら恋人に何と言いますか？ その理由は？ ○「行かせる」 ・夢をかなえてほしいから。 ・後悔してほしくないから。 ○「止める」 ・離れるのは寂しいから。 ・3年も待てないから。	○資料を読む前に、資料について（主人公の職業、現在の状況、ケニアという国）、教師が解説をし、生徒に共通認識をもたせる。 ○「行く」「行かない」を考えさせる中で、主人公の迷いにも心を向けさせたい。 ○主人公の恋人の思いも想像し、主人公の決断は周りの人にも少なからず影響を与えるものであることにも共感させたい。

	学習活動	発問と予想される生徒の反応	留意点
		【発問3】	
		「風に向かって立つライオンでありたい」とはどういう生き方を言うのだろうか。	
終末	5. ケニアで活躍している日本人たちの様子について知る。	<ul style="list-style-type: none"> ○逆風の中、立ち向かっていく生き方 ○くじけない生き方 ○夢に向かって進み続ける生き方 【スライドによる紹介】 <ul style="list-style-type: none"> ・長崎大学熱帯医学研究所ナイロビ拠点 ・青年海外協力隊員 (古閑さん、清水さん、荒牧さん、豊田さん) ・SCC菊本さん ・MCC松下さん 	<ul style="list-style-type: none"> ○主人公の強い「志」に気づかせ、共感させたい。 ○実際に現在ケニアで単身活動をしている日本人の話聞き、様々な「生き方」があることに気づかせ、考えさせたい。
	6. さだまさしさんの「風に立つライオン」を聴く	【ケニアの写真の提示】	
	7. メッセージを書く。	【終末】 主人公へメッセージを書いてみよう。	○自分が考えたこと、感じたことなどを自由にワークシートに記入させる。
	8. まとめ	【終末】 自分の夢を実現させるためには何が必要で、どんなことが大切なのだろう。	

生徒の反応（ワークシートの記述より）

発問1：あなたは医者のお卵です。恋人もいます。そんなあなたの所へアフリカの子どもたちを助けるための医療活動の誘いが来ました。条件は単身で3年以上の勤務です。あなたはどうしますか？

「行く」(22人)

- ・アフリカの子どもたちの命の方が大切だから。
- ・医者としての技術が上がるから。 ・自分が成長できるから。
- ・自分ができることをやりたい。 ・行かなかったら後悔するから。
- ・自分の夢をできるところまで追いかけていたいから。
- ・もう2度とチャンスが来ないかもしれないから。

「行かない」(10人)

- ・3年は長すぎる。 ・治安が悪いところに行くのは不安。
- ・不便な生活は嫌。 ・一人で行くのは寂しい。
- ・誰か身近な人がいないと1人で3年はつらい。
- ・恋人と一緒にいたいし、日本でも医学は学べるから。

発問2：あなたはその恋人です。大好きな人がアフリカへ行くべきかどうか悩んでいます。あなたなら何と恋人に言いますか？

- ・命を助けることは素晴らしいことだから行って、と言う。
- ・多くの人のためになるのなら、行ってほしい。
- ・自分のせいでチャンスを逃してほしくない。
- ・好きだから、帰りを待っている、と言う。
- ・若いうちに色々なことに取り組んだ方がいい。
- ・行かないでほしいけど、行きたいなら行って来い！
- ・一緒にいたいから行かないでほしいと言う。
- ・事件に巻き込まれるかもしれないから行ってほしくない。
- ・おめでとう。すごいことだね。
- ・自分がしたいことをやってほしい。

発問3：「風に向かって立つライオンでありたい」とはどのような生き方を表していると思いますか？

- ・どんな困難が立ちはだかっても、孤独になっても、それを乗り越えられる強い人間になりたい。
- ・どんな極限の状態でも強く生きる。
- ・困難なことがあっても、ライオンみたいに堂々としていたい。
- ・困難に正面からぶつかり、勇ましく生きる。
- ・うろたえず、堂々とした生き方。
- ・どんなこともあきらめない気持ち。
- ・前向きにチャレンジする生き方。
- ・色々なことに負けない強い意志を持つこと。
- ・何があっても、夢に向かって頑張る生き方。
- ・何にも負けない気持ち。
- ・自分なりに頑張ること。
- ・一人でも物事に立ち向かう生き方。
- ・挑戦する生き方。

成果と課題

■ 成 果

- ・ 本教材に登場する青年医師は、架空の人物ではなく、実在する人物であるが、生徒にとってはやはり「見知らぬ登場人物」として距離を感じずにはいられない相手である。しかし、担任である私が実際に会って話を聞いてきた日本人の写真を見せ、「生」の言葉や様子を伝えられたことで、ケニアやそこで活動する日本人たちへの生徒の興味は大きく違ったと感じた。

■ 課 題

- ・ 時間配分が予定通りに行かず、終末部分が生かせなかった。(2時間扱いにし、第1次でケニアの人々の暮らしや風景の紹介とともに、青年海外協力隊員として活躍する日本人の実例について知らせ、第2次で本教材を取り扱う計画にすれば、終末の深まりを持たせることができたかもしれない)
- ・ 終末の「主人公へのメッセージ」は、ケニアで活動している協力隊員へのメッセージに変え、実際にそのメッセージを現地隊員に届ける、という活動もできるのではないかと考えた。

ケニアと日本：比べて、視野を広げよう

小坂 征史
KOSAKA MASAFUMI

赤江まつばら支援学校、他（宮崎県）

担当教科：小学校外国語活動、英語（中・高）

●実践教科：総合学習（小学部1年～4年）、
英語Ⅱ（高等部2年）、英語（中2）、
卒業生訪問

●時間数：5時間

●対象学年：小学校1～4年、高校2年生、
中学2年生、卒業生

カリキュラム

■ねらい

- ケニアの概要を学び、私の見たケニアを伝え、異文化への興味関心を高める。
- 日本（自分）とケニアの違いを「疑問詞」の学習を通して気づかせたり考えさせたりする。
- 自分と世界とのつながりを知り、自分にできることを考えさせる。

■実践内容

回	プログラム	備考
1	<p>※総合学習（小学部1年～4年：参加6名）として実施</p> <p>【地理的把握】</p> <p>・「書き込み地球儀」をさわらせ、①地球の上の日本、②アフリカ大陸の大きさ③ケニアの位置を知る。 →全員で協力して探し、共有する。</p> <p>【身近なものを比べ、異文化を知る】</p> <p>・通貨、言語、学校生活と子どもたち、生き物（動物）などを比較し、一緒に考え、クイズ形式で学ぶ。 〈対比表〉〈フォトランゲージ〉</p>	<p>写真、通貨（紙幣・硬貨） 国旗、書き込み式地球儀</p>
2	<p>※卒業生（短大科目等履修生：1名）の支援技術器材メンテナンスの際に個別で実施。第1回と同じ内容を、現在学習中の英語でやさしい表現を用いて実施。</p>	
3	<p>【英語を使ってケニアの文化、歴史、生活を知る】（高2年：1名）</p> <p>・疑問詞を活用して、ケニアの文化、歴史、生活を知る。 ・国旗の（色が）表すものを知ること、ケニアに「植民地」、「独立」の歴史があることを知る。</p>	
4・5	<p>【英語を使ってケニアの文化、歴史、生活を知る】（中2：1名） 3時間目とほぼ同じ内容を実施。</p> <p>【支援の方法を考える】</p> <p>・疑問詞を用いながら、「貿易ゲーム」を簡略化して行い、 ・What（何を）、Who（誰が）、When（いつ）、Where（どこに）、How（どのように、どのくらい）の5つの観点から自分にできることを考えてみる。</p>	<p>「国際理解教育実践資料集」（JICA 地球ひろば） 「新・貿易ゲーム〔改訂版〕」（開発教育協会・かながわ国際交流財団）</p>

授業実践の詳細

1 時限目「クイズでケニア！【異文化理解】」

1 子どもの活動の流れ

- ① 日本とケニアの位置と大きさ確認・・・「書き込み地球儀」を用いて日本の位置・大きさ、アフリカ大陸とケニアの位置・大きさを確認した。(教材1)
- ② 国旗の紹介・・・日本の国旗と比べ、感想を述べ、ケニア国旗の色や紋章の意味を紹介した。(教材2)
- ③ 通貨、言語、子どもたちの学校生活、生き物など身近なものを「比較」の視点から考え、多様性の理解を深めた。(教材3、4)

この時限のねらい

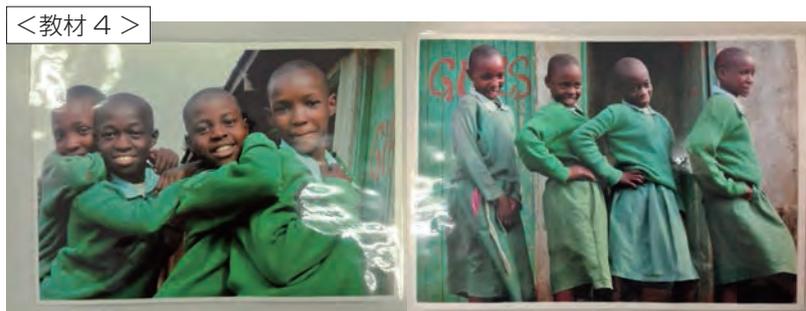
世界には多様な国々、文化があることを知り、通貨、言語、子どもたちの学校生活、生き物など身近なものの違いに気付かせ、多様性の理解を深める。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 触る、探す、色を塗る、距離や大きさを比べることを通してケニアの位置、大きさを正確に把握させることができた。
- ◇ 「女の子は何人？」と出題した写真クイズ（小学生：男の子も女の子も丸刈り）は「丸刈りは男の子」という固定観念をくつがえしたことで子どもたちにとって、一番インパクトがあったようであった。
- ◇ 通貨は実物を提示したため、紙幣の「透かし」を探したり、色を比べたり、中には硬貨の摩耗の程度を発見して、理由を考え始めるなど、予想以上の考察の深まりがあった。

3 使用した教材

- <教材1> 書き込み地球儀、
- <教材2> 組み立て国旗、
- <教材3> 通貨（紙幣・硬貨）
- <教材4> 写真1,2（小学生・女兒）



※教材4は両面印刷&パウチ処理したもの

2 時限目「英語でケニア！」

1 子どもの活動の流れ

- ① 日本とケニアの位置と大きさ確認・・・“Google Earth”を用いて日本の位置・大きさと、アフリカ大陸とケニアの位置・大きさを確認した。
- ② 国旗の紹介・・・日本の国旗と比べ、感想を述べ、ケニア国旗の色や紋章の意味を紹介した。(教材2)
- ③ 英語がアフリカでも公用語として存在することを知り、教材を通して「イギリス英語」が用いられていることを確認した。(教材5)
- ④ 通貨、言語、子どもたちの学校生活、生き物など身近なものを「比較」の視点から考え、多様性の理解を深めた。(教材3、4)

この時限のねらい

世界には英語を公用語とする国があることを知り、通貨、言語、子どもたちの学校生活、生き物など身近なものの違いから文化の違いに気付かせる。

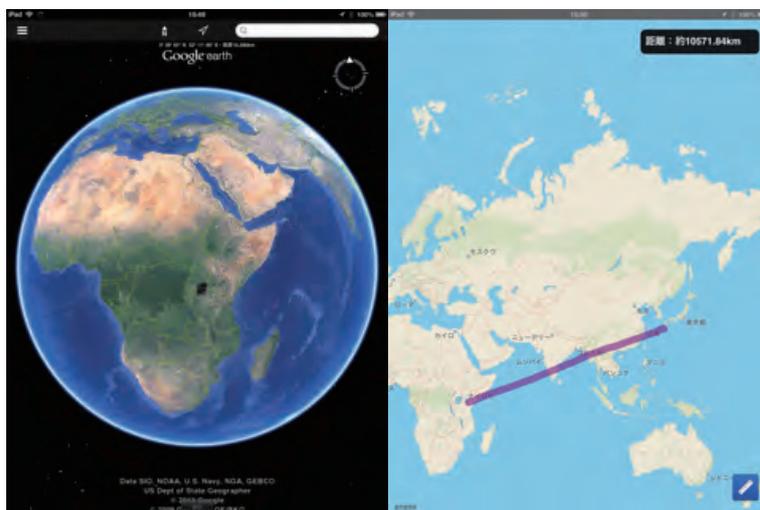
2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 肢体不自由のため、タブレット端末 (iPad) 上の“GoogleEarth”やアプリ「なぞる距離」を使用した。触ることや、距離や大きさを比べることを通してケニアの位置、大きさを正確に把握することができた。
- ◇ 「女の子は何人？」と出題した写真クイズ (小学生：男の子も女の子も丸刈り) では「髪質の違い」、「ボロボロの制服」に気づき、「経済格差・貧困とは？」を考えるきっかけを得ることができた。
- ◇ 日頃からBBCニュースを聞くなど、音声への親しみはあったが、つづりや階数表示の違いを知り、英語への興味関心がさらに深まった。

3 使用した教材

- <教材2> 組み立て国旗、<教材3> 通貨 (紙幣・硬貨)、<教材4> 写真1,2 (小学生・女兒)
<教材5> 写真3 (エレベーター・階数表示)

<教材5>



【参考画面】 Google Earth (左) と学習アプリ「なぞる距離」(右)

3 時限目「異文化理解入門：英語を使ってケニアを知ろう」

1 子どもの活動の流れ

- ① 日本とケニアの位置と大きさ確認・・・“Google Earth”を用いて日本の位置・大きさ、アフリカ大陸とケニアの位置・大きさを確認した。

【Where, What】を用いた活動

- ② 国旗とその表すものを知る（歴史の概観）
それぞれの色が表すものを知った。

【How many (much)】を用いた活動

【What】を用いた応用表現】

（歴史・過去の時点を知るために）【When】を用いた表現】

- ③ 生活：通貨（紙幣と硬貨）

【Who】を用いた活動

【How many (much)】を用いた活動

この時限のねらい

世界には英語を公用語とする国があることを知り、学習中の疑問詞を用いながら、アフリカ大陸、ケニアの位置、国旗、簡単な歴史を学び、異文化理解の入口とする。授業は基本、すべて英語で行う。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ タブレット端末（iPad）上の“GoogleEarth”やアプリ「なぞる距離」を使用した。触る、距離や大きさを比べることを通してケニアの位置、大きさを正確に把握することができた。
- ◇ 国旗の学習では「赤」から「国の独立」と「植民地」という用語を知り、世界には様々な歴史を持つ国があることを学んだ。後述の通貨も含め、活字以外で知る海外、外国は子供たちにとって教師の想像を上回る刺激的なものであったようである。
- ◇ 予想通り、初めてみる外国通貨に興味津々で、肖像が誰かを知るために“who”を、通貨単位を知るために what (kind of)、通貨価値を知るために、“How much”など“Information gap”を埋めるために（自らの疑問の答えを知るために）積極的に英語を用いる姿が見られた。

3 使用した教材

- <教材2> 組み立て国旗、<教材3> 通貨（紙幣・硬貨）、
<教材6> 写真4（飛行経路図）とホワイトボード上での展開



4 時限目「異文化理解入門：英語を使ってケニアを知ろう」

① 子どもの活動の流れ

- ① 5つのコミュニケーション・キーワードの紹介：
What（何を）、Who（誰が）、When（いつ）、Where（どこに）、How（どのように、どのくらい）を学んだ。
- ② ケニアの概要紹介
国旗とそれが表すものを知る（歴史の概観）
生活を言語と通貨から知る。③につなぐため、貧困の実態についても触れた。
- ③ 5つのコミュニケーションキーワードから支援を考える
「貿易ゲーム」の導入を行った。

この時限のねらい

世界には英語を公用語とする国があることを知り、初出の疑問詞を用いながら、アフリカ大陸、ケニアの位置、国旗、簡単な歴史を学び、異文化理解の入口とする。

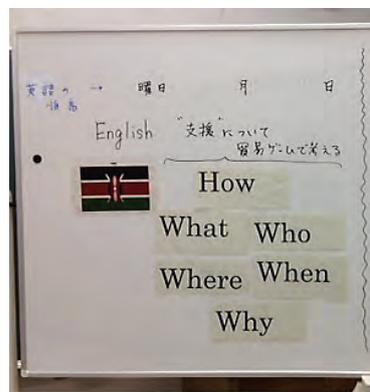
② 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 5つのキーワードでたった三文字の「ケ・ニ・ア」という3つの言葉が少しずつ明らかになるにつれ、疑問詞にも海外の国、ケニアにも同時に興味・関心及び理解が深まっていった。
- ◇ 国旗の学習では「赤」から「国の独立」と「植民地」という用語を知り、世界には様々な歴史を持つ国があることを学んだ。通貨も含め、活字以外で知る海外、外国はここでも子供の想像を上回る刺激的なものであったようである。
- ◇ 支援する（助ける・助け合う）ことについて、5つのキーワードをもとに考え、「貿易ゲーム」の導入とすることができた。「なぜ」を考えることにあまり慣れていない様子だった。

③ 使用した教材

- <教材2> 組み立て国旗、<教材3> 通貨（紙幣・硬貨）、
<教材7> 写真5（都市と地方の格差）
※教材7は両面印刷&パウチ処理したもの

<教材7>



※教材7は両面印刷&パウチ処理したもの

5 時限目「支援・協力について考えてみよう」

1 子どもの活動の流れ

- ① 5つのコミュニケーション・キーワードの復習：
What（何を）、Who（誰が）、When（いつ）、
Where（どこに）、How（どのように、どのくらい）
の発音と意味を確認した。
- ② 貿易ゲーム（簡略版）を通して様々な「格差」に
気づかせた。
【キーワード】：資源（もの）、道具と技術、資金（お
金）、教育、支援（援助）、分業
- ③ 「格差」を解消する方法について考えさせた。

この時限のねらい

「貿易ゲーム」を通して、様々な「格差」に気づかせる。気づいた格差の1つ1つについて、その解消方法を考える。時間にゆとりがある場合は、今、自分が現実の格差解消のためにできることを考えさせる。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 5つのコミュニケーション・キーワードは「貿易ゲーム」という「実践の場」を与えられたからか、非常に定着がよく、積極的に用いようとする姿勢が見られた。
- ◇ 「貿易ゲーム」が提示する「格差」は簡明で、資源、道具、資金の差を目に見える形で提示されることで素早く理解することができた。
- ◇ 「貿易ゲーム」を通して、「格差」や様々な困難はひとりでは解消できないことを知ることができた。解決するための1つの方法として協力（テキスト中では「国際分業」）があることを知ることができた。

3 使用した教材

- <教材7> 「新・貿易ゲーム」[改訂版]
- <教材8> 「国際理解教育実践資料集」

■全体を通して

① 授業の様子



地理的位置関係を調べる様子



比べて違いを考える様子



国旗から歴史と文化を学ぶ

② 参考文献・資料

- 1) 『新・貿易ゲーム [改訂版]』 2001年 開発教育協会・かながわ国際交流財団
- 2) 『国際理解教育実践資料集』2013年 独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

成果と課題

■成 果

幼・小学部から高等部・卒業生まで幅広く異文化&開発途上国について触れさせることができた。幼小学部は実物に触れたり、自分たちの身の回りのものと比べたりして体験的学び、中高等部は、国旗や言語などから植民地としての歴史を知り、開発途上国が現在直面する様々な困難について考えることができた。

■課 題

年度途中からとなり時間が限られてしまい、学習内容を深化させることができなかった。来年度以降、年間指導計画に組み入れて計学的に学習させたい。

■備 考

「貿易ゲーム」の教育力には驚かされた。今後、総合学習、LHR 等の年間計画の中に「国際理解教育」を組み込み、継続的に実践を積み重ねたい。

ケニアの子どもたちから幸せを考えよう！

上塩入 美 喜

KAMISHIOIRI MIKI

鳳凰高等学校（鹿児島県）

担当教科：外国語（英語）

●実践教科：総合的な学習の時間、英語Ⅰ、Ⅱ

●時間数：6時間

●対象学年：高校2～3年生

カリキュラム

■ねらい

国際協力を身近なこととして、捉える。

ケニアの子どもたちの生活を通して、幸せとは何かを考える。

諸問題を解決するために、教育の大切さに気づく。

■実践内容

回	プログラム	備考
1	<p>【世界へ飛びだそう】 将来訪れてみたい国を挙げ、地域別に分け、人気と不人気の理由を考える。</p>	
2	<p>【ケニアってどんな国？】 ケニアの写真を見て、日本と大きく異なるところ、似ているところを探し、発表し、共有する。</p>	
3	<p>【不便＝不幸ではない】 写真を見て、ケニアの子どもたちが置かれている厳しい環境を知る。しかし、そこで生活している子どもたちの笑顔を見て、その理由を考え、発表し、共有する。</p>	
4	<p>【What is 'HAPPINESS'?】 自分が幸せだと感じるのはどんな時か振り返り、ケニアの子どもたちの笑顔から、幸せになるために必要なこととは何かを考え、発表し、共有する。</p>	
5	<p>【A girl who demanded school】 映像教材「スーパープレゼンテーション」及び、そのスピーチ原稿を参考に、ケニアの子どもたちの置かれている現状と課題を理解する。</p>	
6	<p>【チョコレートから児童労働を考えよう】 4種類のチョコレートを比較して価格の違いの理由を考え、フェアトレードを知り、児童労働について考える。</p>	

授業実践の詳細

1 時限目「タイトル 世界へ飛びだそう」

① 子どもの活動の流れ

- ① 教師が今回研修で訪れたケニアの話聞き、加えてこれまでに訪れた国（韓国、カナダ、アメリカ、中国、ニュージーランド、フランス、イギリス）の話聞く。
- ② 将来行ってみたい国を好きなだけ挙げ、グループごとに発表する。その際、地図上に国名を書いた紙を貼る。
- ③ 紙が貼られた地図を見て、人気の地域とそうでない地域とを確認し、なぜ行きたいと思うのか、なぜ行ってみたいと思わないのか、それぞれの理由を考え、グループごとに発表する。

この時限のねらい

異文化理解、国際協力について学ぶ前に、外国について考える機会を持ち、教師の体験を通して興味関心を持たせる。

② 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 日頃、授業では正解を求めなければならないことから、皆の前で自分の意見を発表することに抵抗を示す生徒が多いが、「行ってみたい国」という正解がない問いをすることで、気負わず、楽しんで取り組んでいた。
- ◇ 行ってみたい国を地域別に分けたことで、大きく差が出る結果となり、その理由を考えた結果、アフリカに対してネガティブなイメージを持っている一方で、「知らない」、「興味が無い」ことが分かった。



③ 使用した教材

<教材 1> 教師がこれまでに訪れた国の写真

2 時限目「タイトル ケニアってどんな国？」

1 子どもの活動の流れ

- ① グループごとに異なる写真を見て、何の写真か予想し、気づいたことを挙げて、発表する。
- ② 再び写真を見て、日本と同じようなところ、全く違うところを探し、発表する。

この時限のねらい

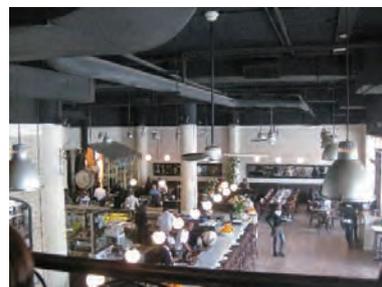
関心が薄く、持っているイメージも否定的なものが多いアフリカについて、ケニアの写真を通して、身近に感じ、関心を持たせる。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 生徒達は、アフリカに対しての関心が薄く、また持っているイメージも「貧しい」、「暑い」、「伝染病」等あまり良いものではなかったため、本時はそのイメージとは真逆の写真を中心に見せた。その結果、自分達の身近にはない高層ビルがアフリカにあることに驚き、逆に田舎ののどかな風景には親近感を持ったようであった。
- ◇ 「電柱があること」→電気がある、「左側通行である」「食事に米を食べる」→日本と同じ、というように、これまであまり知らなかったアフリカに、実は日本と同じようなところがたくさんあると強く印象付けられていた。

3 使用した教材

<教材2> 教師がケニアで撮ってきた写真（都市部の景色、田舎の風景、食事等）



3 時限目「タイトル 不便＝不幸ではない」

① 子どもの活動の流れ

- ① グループごとに配布された写真を見て、何の写真か予想し、気づいたことを挙げ、発表、皆で共有する。
- ② 写真の環境下で生活することを想像し、自分達ならどのような気持ちになるか考えた後、実際にそこで暮らしている、ケニアの子どもたちの笑顔の写真を見て、子供たちの気持ちを想像し、発表する。

この時限のねらい

ケニアの子どもたちが置かれている環境を知ること、自分達がいかに恵まれた環境にいるかを認識すると共に、環境だけで幸せは決まるものではないと気付く。

② 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 1枚目は悪印象を受ける写真、2枚目は1枚目の環境にいる笑顔の子どもたちという写真を選んだため、そのギャップに非常に驚いていた。
- ◇ 自分達がそこで生活することを想像させると、「辛い」「登校拒否になりそう」とネガティブな意見ばかりが挙がったため、ケニアの子どもたちの笑顔の写真を見て、写真を撮る時だけ笑顔なのは、と疑う生徒もいた。しかし、その時の会話も織り交ぜながら紹介をしたことで、本当に楽しく過ごしていることが分かり、自分達と変わらない普通の子どもたちなのだと認識することができた。

③ 使用した教材

<教材3> 教師がケニアで撮った写真（給食、トイレ、教室、そこで生活する子どもたち）



4 時限目「タイトル What is 'Happiness'?」

① 子どもの活動の流れ

- ① 自分が「幸せ」を感じるのはどんな時か、グループで意見を出し合い、発表し、皆で共有する。
- ② 前時の写真を見て、子供たちが幸せだと感じている理由を考え、発表する。
- ③ 幸せになるための条件を考え、発表し、皆で共有する。

この時限のねらい

自分達なら不幸だと感じる環境下で幸せそうに笑う子どもたちの写真を通して、幸せになるために必要なことは何かを考える。

② 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 普段、小さなことで不満を漏らしてしまいがちな生徒も多いが、これまでに3時間学習してきたこともあり、「幸せ」とは、衣食住に関することや、家族や友人とのつながりなど、身近なところにあるのだという意見が多数を占めた。



- ◇ 前時では、自分達なら辛くて耐えられないと感じる環境にいるケニアの子どもたちが、笑顔でいることに対して信じられない思いでいっぱいであ

ったが、「幸せ」とは身近なところにあると認識したため、ケニアの子どもたちも自分達と同じであると気付くことができた。また、自分達とは概念が異なるため、幸せだと感じているという意見も出た。

③ 使用した教材

<教材3> 前時で使用した写真

5 時限目「タイトル A girl who demanded school」

① 子どもの活動の流れ

- ① 事前に、英文スピーチの一部を提示し、音読・和訳して内容を確認する。
- ② 映像「スーパープレゼンテーション 'A girl who demanded school」(NHK)を見る。
- ③ スピーチの中からキーワードを探し、内容理解をする。

この時限のねらい

英文読解力、リスニング力の向上と共に、映像を通して、前時の「笑顔の理由」の一つを知る。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 普段、小さなことで不満を漏らしてしまいがちな生徒も多いが、これまでに3時間学習してきたこともあり、「幸せ」とは、衣食住に関することや、家族や友人とのつながりなど、身近なところにあるのだという意見が多数を占めた。
- ◇ これまで数時間、ケニアを通して学習してきているため、カケンヤさんのスピーチを興味深く聞くことができた。
- ◇ カケンヤさん体験談や取り組みによって学校に通うことができるようになった少女達の変化に驚き、教育の大切さに気付くことができた。

3 使用した教材

<教材4> ワークシート（英語スピーチの一部）

<教材5> スーパープレゼンテーション 'A girl who demanded school' カケンヤ・ンタイヤ（NHK）

6 時限目「タイトル チョコレートから児童労働を考えよう」

1 子どもの活動の流れ

- ① 4種類のチョコレートの味、パッケージを比べて気付いたことを挙げる。
- ② チョコレートの価格の内訳を考え、種類によって価格が違う理由を考える
- ③ 児童労働の一つを知り、フェアトレードについて知る。

この時限のねらい

身近なチョコレートを通して、価格の内訳や製造過程から、児童労働とフェアトレードについて考える。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 4種類のチョコレートを比較し、違いを知るために価格の内訳を考えてみたが、工場の人件費は挙げても、カカオについては材料費の分しか考えておらず、教師がヒントを出してはじめてカカオ農園で働く人の存在に気付くことができた。
- ◇ 以前、英語の教科書で児童労働を取り上げた課を学習していたが、その時は英文を理解することで精一杯だったため、本時を通して、児童労働について深く考えることができた。
- ◇ 児童労働とは、その国だけの問題でないことを認識し、廃止していくためには、関心を持ち続けることが必要であること、また教育がいかに大切であるかということを理解することができた。

3 使用した教材

<教材6> ワークシート（チョコレートの価格、味、パッケージ等気づいたことを記入）

<教材7> カカオについて（Wikipedia, NGO ACEの資料より抜粋したもの）

■全体を通して

① 授業の様子

<写真1>

写真を見て、気づいたことを挙げている。



<写真2>

写真を見て、日本との類似点、相違点を探している。



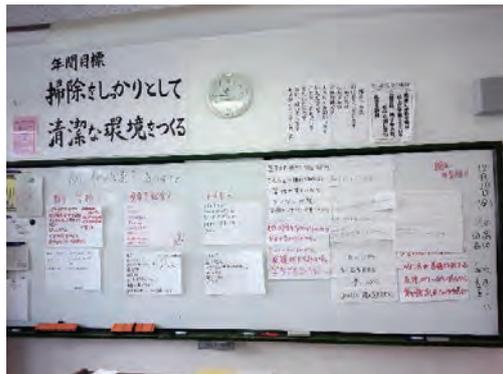
<写真3>

子どもたちの笑顔の理由を考えている。



<写真4>

生徒たちが考えたケニアの子どもたちの笑顔の理由



② 参考文献・資料

- 1) 「スーパープレゼンテーション 'A girl who demanded school」 NHK

成果と課題

■成 果

生徒たちは、これまであまり知らなかったアフリカをより身近に感じ、幸せとはすぐそばにあるものだと認識することができた。関心を持つことで、英語のスピーチを意欲的に聞くことができ、児童労働やフェアトレードについても積極的に学ぶことができた。

■課 題

連続した授業時数を確保することが難しく、私が研修で学んだ国際協力の分野まで実践することができなかった。次年度以降も継続していくこと、また1時間で完結できる授業の組み立てを考えたい。

ケニアって どんなところかな

益田 寛子

MASUDA HIROKO

鹿児島聾学校（鹿児島県）

担当教科：小学校全科 5年

●実践教科：特別活動

●時間数：7時間

●対象学年：幼稚園3歳児～小学6年生

カリキュラム

■ねらい

- ・ケニアの動物を見てみる
- ・ケニアの生活について知る

■実践内容

回	プログラム		備考
1	幼稚園部 (3～5歳)	【動物を探そう】 ・ケニア国立公園内での動物が写っている写真を見て、知っている動物がいるか探してみる。 ・何匹（頭）隠れているか探す。 ・今回、はじめて見た動物の名前を知る	プロジェクター スクリーン パソコン
2		【ケニアについて知ろう（食べ物）】 ・ケニアの食事を知る。今までの自分たちの食事と比較して、違うところや同じところを見つける。 ・どんな材料で作られているかを知る。	
1	小学部 (1～6年)	【ケニアの学校について知ろう】 ・ケニアの学校の写真を見る（校舎、机、教科書など）。 ・ケニアの言葉と日本の言葉について知り、聴覚障害者の手話の違いを知る。	布 世界地図 絵本
2		【ケニアの生活について知ろう】 ・住居について知ろう。自分の知っている住居を振り返り、ケニアの住所を想像してみる。写真を見て、日本との違いを確認する。 ・布を巻いて服を着てみる。	
3		【ケニアの食事について知ろう】 ・ケニアの食事の写真を見て、日本との違いを見つける ・水の使い方の違いを知る。	
1	小学部 (5年)	【世界とつながる日本】 ・ケニアの輸入品・輸出品について調べ、どのような特徴があるかを考える。	

授業実践の詳細

1 「動物をさがそう」(幼稚園3歳～5歳)

① 子どもの活動の流れ

- ① 自分の住んでいる場所やケニアの場所を知ろう
 - ・ 自分の住んでいるところの場所を確認する。県や市、町名で答える。「日本」という国の中の一部であることを確認する。今回の学習は「ケニア」の学習ということ伝え、世界地図で場所・位置関係を確認する。
- ② 動物をさがそう。
 - ・ 写真を見て、隠れている動物をさがして指さして答える。何匹いるか、名前は何かを答える。どんな場所にいたのか、何匹くらいいたのか、何を食べていたのか、雄と雌の違いなどを説明する。
- ③ どんな動物がいるかを知ろう。
 - ・ 絵本や写真でなかなか触れることのない動物を見て、名前を知る。何だろう、見たことない動物、〇〇に似ているなど答える。

この時限のねらい

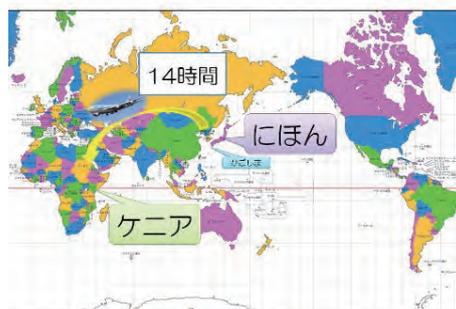
動物の名前を知る。
写真の中から動物を探す。

② 子どもの活動の成果・反応

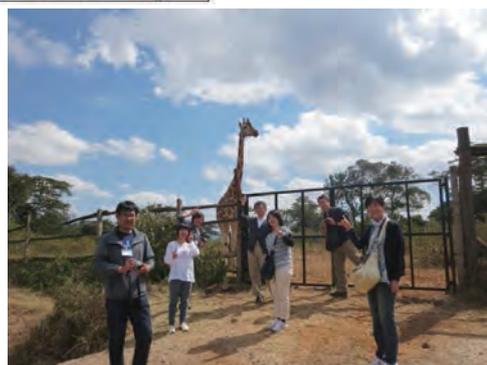
- ◇ 世界地図の中で時間や飛行機などで状況を記すが、「遠いところ」と言う感覚を伝えることは難しく「近いね」という反応だった。「鹿児島」「日本」ではないところということは、理解しているようだった。
- ◇ 草原の中に隠れている動物を何とか探そうと必死に見つめる様子が見られた。
- ◇ 馴染みのない動物には、バッファローを「牛みたい」、ガゼルを見て「わあ、かわいい」という反応が返ってきた。

③ 使用した教材

- <教材1> 世界地図
- <教材2> 動物の写真(以下)
- <教材3> PPT 自作スライド



どうぶつは いるかな? さがしてみよう。



2 「ケニアについて知ろう（食べ物）」（幼稚部3歳～5歳）

1 子どもの活動の流れ

① 食事について学ぼう。

- ・ 今日の給食は何を食べたかを思い出し、パンやごはんを主食として食べていることを確認する。また、野菜や肉や魚も食べていることを提示する。

② ケニアでの食事について知ろう。

- ・ 知っている海外の料理を挙げ、ケニアの料理を想像する。（カレー、スパゲッティ、餃子ハンバーガーなど）
- ・ 写真を見て、何を食べているのか、日本と違うことを探し発表する。
- ・ 簡単な作り方や材料の紹介を聞く。

この時限のねらい

自分たちの日々の食べ物に関して関心を持ち、ケニアの料理について知る。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 食べ物について「おいしいのかな。肉みたい」ヤギの肉が、日本ではあまり食べられていないものであるという意識は薄かったが。おいしそう、食べてみたい、という興味は沸いているようだった。
- ◇ 「手で食べているね」「箸が嫌いなのかな、苦手なのかな」との感想から、箸を使っていないという事に気付いた。
- ◇ 豆料理を見て、自分たちの給食との違いを比較していた。給食の様子「牛乳がない」などの声が聞かれた。

3 使用した教材

<教材1> 給食の様子、食事内容の写真

<教材2> ケニアの食事の写真

<教材3> ヤギの肉とケニアの主食



3 「ケニアについて知ろう（学校）」（小学部1年～6年）

1 子どもの活動の流れ

① 学校の写真を見よう。

校舎、机、教科書、人、言葉など日本と同じではないことに気付く。また、共通している部分に気付くことができる。

② 言葉について違うところを知ろう。

日本語、手話以外の言葉について知る。ケニアの聴覚障害者の人達言葉について知る。

この時限のねらい

外国の学校の様子を知る。
自分の生活や環境との違いを見つける。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 「窓がないね」「みんなで机を使っているね」など自分の学校との違いに気付くことができた。（1年）

◇ 「裸足の人があるよ、靴が嫌いなのかな。」質問した本人は、靴が嫌いで同じ気持ちなのか興味を持っていた。（1年）

◇ 同じような寮の様子（共同生活の場）に興味を持っているようだった。きれいにた服が畳んである様子など見て自分の生活を振り返っていたようだった。（4年）

3 使用した教材

<教材1> 写真



4 「ケニアについて知ろう（生活）」（小学部1年～6年）

1 子どもの活動の流れ

- ① 動物の写真を見よう
- ② ケニアでの住居を知ろう。
日本の家屋とケニアの家屋の違いを知る。いろいろな形があるが写真で示すような日本とは違った形もあることを知る
- ③ ケニアの服について知ろう。
写真を見て、布を巻いて、服にする方法があることを知る。実際に、着て体験する。

この時限のねらい

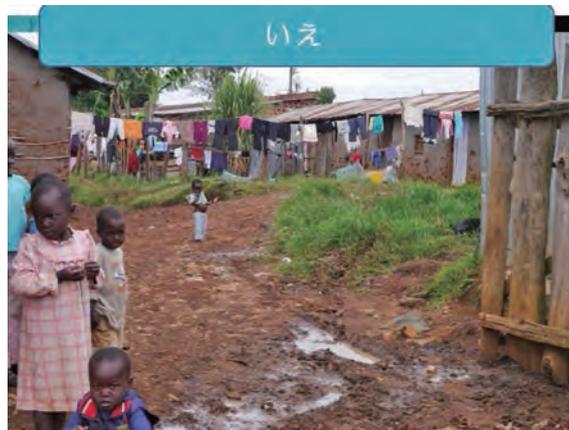
日本での水の手に入れ方は海外とは違うことを知る。
「主食」という言葉と意味を知り、ケニアの主食、食事の方法を知る。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「雨が降ったらどうするんだろう」「これがコンロなの～」と日本との違いに驚いた様子であった。
- ◇ 洋服を着た感想では「なんだかあったかい」「1枚で着れるなんて知らなかった」「めずらしい」などの声が聞かれた。（5年）

3 使用した教材

<教材1> 写真



5 「ケニアについて知ろう（身の周り）」（小学部1年～6年）

1 子どもの活動の流れ

- ① 水に関する写真を見よう。

日本での「水の手に入れ方」ことについて振り返る。
ケニアでの様子を見る。学校の様子、地域の様子

- ② 食事に関する写真を見よう。

今日の給食、朝食を思い出し、ケニアの食事と比較する。（主食の違い、原料や作り方、肉の種類の違い、地域の環境によるもの、など説明を加える）

この時限のねらい

ケニアの住居について知り、関心を深める。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 写真から「え～、（水を）買うの？」など反応が見られた。
- ◇ 「クリスマスで何が欲しいですか」の質問に「いろいろな外国に行ってみたい」と書くなど海外に興味を持つ児童がいた。
- ◇ 主食という意味を知り、また、主食の作り方を理解し、後日友達に説明する様子が見られた。違いについて理解していたようだ。
- ◇ 「野口英世の黄熱病の場所だ、黄熱病の予防の注射をしましたか」など今まで習った学習と結びつけて聞いている様子だった。（6年）

3 使用した教材

<教材1> ケニアの写真



6 「日本とケニアをくらべてみよう」(小学部5年)

1 子どもの活動の流れ

- ① 日本の輸出品と輸入品について学習したことを振り返る。

輸出で多い品目、輸入で多い品目を以前教科書で学習したことを振り返る。

- ② 同じように、ケニアの輸入品と輸出品は何があるか調べて、世界地図に表してみる。

ケニアの輸入品目、輸出品目を調べる。

- ③ どんな特徴があるのか調べ、その理由を考える。

調べた中から、日本とは違う点を見つけ、気候などの面から特徴を予想する。

この時限のねらい

日本とケニアの輸入品と輸出品を調べ、世界地図に表し、それぞれの特徴を学習する

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「食べ物は何でも作れるのかな」「野菜は作れるのかな」気候と作物の関係を考えることができた

- ◇ 「自動車は日本は輸出量が多いけど、ケニアはどうして少ないのかな」産業の面にも目を向け、国の特徴をつかむことができた。



写真1 世界地図の中に、ケニアの輸入品輸出品目を書き入れる。

3 使用した教材

<教材1> 外務省 HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kenya/data.html>

<教材> 日本貿易振興機構 (ジェトロ) <http://www.jetro.go.jp/world/africa/ke/>

■全体を通して

① 授業の様子



<写真1> 幼稚園でケニアについての映像(写真)を見ながらの話



<写真2> 世界地図を見て、事前に学習した「ケニア」の位置を探す



<写真3> 実際に布を巻いて、洋服を着た感じを味わう



<写真3> 「動物はどこにいるかな？」で挙手をして答える

② 参考文献・資料

- 1) 『ほくのだいすきなケニアの村』 ケリー クネイン著
- 2) 外務省 HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kenya/data.html>
- 3) <教材>日本貿易振興機構(ジェトロ) <http://www.jetro.go.jp/world/africa/ke/>

成果と課題

■成 果

- ・ 今まで海外の事を知らなかった児童が、海外のニュースやオリンピックについて自分から話すようになった。
- ・ アフリカの様子や話題が出るときに、イメージが持てるようになったようだった。
- ・ 日常生活の中で「ケニアはどうか？」と質問し、興味を持つことが増えた。

■課 題

- ・ 他国の様子にも興味を持てるような言葉掛けをしたい。
- ・ 日本の中での都心部と農村部の違いがあるように、提示したことがすべてではないことも伝えたい。

